

Timeless Kiss



神原 涼

Timeless Kiss - 弟

「洋子先生、さようなら」

小さい手をヒラヒラさせてお母さんと帰る子どもたち。

「さようなら、また明日ね」

ハァ〜、今日も一日終わりました。

掃除して戸締りして、やっと裏の自宅に帰ったのが6時。

「洋子、終わったのかい？」

おばあちゃんが台所から顔出した。

「うん、ねえ、康平くんね、やっぱり東幼稚園に移るって」

「あらあらそう」

「中途入園の試験に受かったんだって」

「あら、よかったねえ」

「よかったねじゃないわよ、また園児が少なくなっちゃうじゃない」

「いいじゃないの、ここがいいって来てくれる子もいるんだから」

まったくノンキなんだから。

うちは幼稚園をやってる。

「花の子幼稚園」

創立40年！

園長はおばあちゃん。

昔ながらの保育... 言ってみれば時代遅れ。

「子どもはノビノビさせてあげなきゃ」って、おばあちゃんは言うけど、

今のお母さんたちが求めているのは「お受験体制」なんだよね。

私が実習に行った幼稚園なんて、英語やお茶の時間まであったもん。

それに比べて、うちの幼稚園は、イモ掘りだとか鬼ごっこだとかそんなのばかり。

しかも、建物も今どき木造、築40年！

これじゃ園児も減るって！

「そういえば、来月は美佐代の一周忌だねえ」

「うん」

一年前... お母さんが死んだ。

私が2歳のときに離婚して、それからここの副園長しながら私を育ててくれた。
身体が弱かったのに、女手ひとつで頑張っ...。
お母さんが死んだとき、私はまだ短大の2年で、いちおう保育科だったけど、
本当は幼稚園の先生になるつもりなんてなかった。
だって、小さい頃からお母さんの仕事見てて大変だってわかってたし、
どっちかっていうと、幼児向けの本の出版社に勤めたかったんだよね。
でも、「洋子...幼稚園のこと...頼んだわね...」なんて言われちゃって...
なんていうの？ いちおう遺言だからさあ、卒業してうちの幼稚園で働くことにした。

何回後悔したことか。

短大卒業したばかりで仕事なんて全然わかんないし、
それに...実は、そんなに子どもが好きってわけじゃないんだよね。
「裏の畑のじゃがいもに花が咲いたよ、秋の芋掘りが楽しみだねえ」
ニコニコして言うおばあちゃん。
今はこのおばあちゃんと二人で暮らしてる。

「あっ、そうそう、忘れてたよ」
おばあちゃんが食器棚の引出しから茶封筒を出してきた。
「今日民生委員が来たんだよ」
「え？」
「それがね、あんたに弟がいるって言うんだよ」
「何言ってるの？ 私、弟なんかいないわよ？」
「それがね、あんたのお父さんの子らしいんだよ」
「え...？」
「多分再婚してできたんだろうね」
そんなの関係ないわよ。
「あんたのお父さん、もう6年も前に死んでたんだってさ」
「ふうん」
そんなこと聞かされてもなんとも感じない。
だって、ぜんぜん憶えてないし、お父さんなんて言われてもピンとこない。
「それからはお父さんが再婚した相手のおじいさんが育ててたらしいんだけどね」
「へえ」
「先週亡くなったんだって」
「へえ」
「それでね、うちで引き取ってほしいって言うんだよ」
「ハ？」
「身寄りがないんだってさ」

「ちょ、な、なに、それ！ なーんでそんな子、うちで引き取らなきゃならないのよ！」

「だって身寄りがないって」

「関係ないじゃない！ お母さんと離婚してずーっと音信不通だったし、

私、お父さんの顔なんて憶えてないし、弟なんて言われたって、他人も一緒だよ！」

「そうは言ってもさあ、かわいそうじゃないか」

「バッカじゃない!? かわいそうもクソもないでしょ！ 施設かなんかに入ればいいじゃん！」

「施設なんてかわいそうじゃないか」

「おばあちゃん！ こんなときに情に流されないでよ！

現実を見てよ！ うちだっていっぱいいっぱいなのよ？ 幼稚園だって、

いつ潰れるかわかんないってときに、なーんでそんな子引き取らなきゃならないのよ！」

「それでもこうしてちゃんと食べていけてるじゃないか」

「だからって、そんな関係ない子引き取る義務なんかないわよ！」

おばあちゃんが悲しそうな顔で私を見た。

「な、なによ？」

「もしも洋子はその子だったらと思うと、おばあちゃんたまらないんだよ」

「え？」

「今はあんたもおとなになったから、おばあちゃんいつ死んでもいいけどさ」

「そんな不吉なこと言わないでよ！」

「まだ洋子が小さくて、美佐代も死んで、おばあちゃんも死んだとしたら、

あんたが施設なんかに入れられて淋しい思いして暮らすなんて考えただけで…」

「ちょ、ちょっと、おばあちゃん、ただの想像で泣かないでよ！」

「だってさ…」

おばあちゃんはエプロンで目頭押さえてる。

おばあちゃんに泣かれるの弱いんだ…私…

小さい頃から、お母さんが忙しいと私の面倒みてくれたのはおばあちゃんだし…

それに…お母さんが死んでから元気なくなっちゃって…

「その子…いくつなの…」

「ええと… いくつって言ってたっけねえ… 8… 8歳だったかねえ」

8歳… 小学校2年か…。

「それじゃ…会うだけ…会ってみるけど…」

「そうしてくれるかい？」

「イヤ～なガキだったら、とっとと帰ってくるからね！」

「大丈夫だよ、洋子の弟だもの、きっといい子だよ」

どうだかね。

「それで、いつ行けばいいの？」

「明日来てくれってさ」

「明日あっ？ 明日は幼稚園があるからダメだよ！」

「大丈夫だよ、吉田先生や佐藤先生っていうベテランがいるんだから、

あんた一人抜けたってなんてことないからさ」

なによそれえっ、私はいてもいなくても変わらないってこと？

まあ...そりゃ...まだぜんぜん仕事できないけどさあ。

「これが地図だって」

おばあちゃんは私に茶封筒を渡した。

「よかったねえ、一人っ子だったあんたに兄弟ができてさ」

よくないっ！

ったくもうっ！

お母さーーん、どうしたらいいのよおおっ！

対面

電車乗り継いで、バスに乗って、地図に書いてあったバス停で降りた。

ええっと... この道を真っ直ぐにいて、左に曲がって、また右に...って、
ずいぶんゴチャゴチャしたところに入っちゃったけど？

道の脇に立ち並ぶ家々は、なんかどれも古ぼてて、どれも同じに見える。

2-7の相馬か...

ないなあ...

あ、この家が2-4だから、一軒、二軒、三...軒...目...って、

えっ？

ボロボロの小さな... これ... 物置...だよな？

窓...は、あるけど...ガラスがなくて汚いビニール貼ってるし...

えっ！ でも、これ、古ぼけたダンボールの切れ端に... 相馬...

ウッソー！ ここのおおっ？

か、帰ろっかな... で、でも、ここまで来ちゃったし...

トントンって、壊れそうなボロボロの木の戸を叩いた。

「ご、ごめんください...」

ギギッと戸が開いて、

「あ、花村洋子さんですか？」

中から、いかにも役所の人みたいな男の人が顔出した。

「は、はい」

「さあ、どうぞ入ってください」

入ってくださいって言われても...入りたくないなあ...

渋々中に入ると、部屋の中は薄暗くてよく見えない。

「透くん、お姉さんがきたよ」

お姉さんなんてやめてよ。

でも、どこにいるの？

目を凝らして暗がりの方を見てると、黒い影が立ち上がって...

え？ ちょっと... なんか... やたら... 背が... 高くない？

暗がりの中からこっちへ歩いてくるのは...

え？ ちょっと待って、だって、これ、誰???

開いたままの戸から漏れる光の中に立っていたのは、
背の高い、ど一見ても、青年なんですけど？

ま、まだ奥にいるのかな？

「相馬透くんです」
役所の人の声。

ヘッ????

見上げると、ポカーンと口開けて私の顔を見てる...これが???

私をジッと見つめる目...
どこかで...見たことある...

バ、バカじゃない？ 初対面だよ、それに、弟って、ちょっと、いったいこれは...

「ジュリア！」
突然目の前の男が私に抱きついたあっ！
「キャーーーー！」

そのまま床に倒れても抱きつかれたままあっ！
「ジュリア！ ジュリア！ やっと会えた！」

な、なに言ってるのおおっ!?
ていうか！ なにこれ!? 誰これ!? タスケテーーーーー！

「ちょ、ちょっと、離して！ 離してーーーーっ！」
もがく私を、もっとギュッと抱きしめて、
「もう離さない！ もう離れなくていいんだ！」
「いいからっ、離してーーーーっ！」
「透くん！ やめなさい！」

役所の人グイッと肩をつかんで、やっと離してくれた。

ゼーゼーゼー...

「大丈夫ですか？」
役所の人が私の手を引っ張って立ち上げてくれたけど、大丈夫じゃないわよっ！
「あの、私の弟って」

「透くんです」

「えっ？ だ、だって、この人おとなじゃないですか！」

「今18歳です」

「ハアアアアアアア？？？？ 8歳じゃないんですかあ？」

「昨日お宅にお伺いしたときにお話ししたはずですが」

おばあちゃーんっ！ 肝心なこと聞き間違えないでよおっ！

18と8じゃえらい違いだよおっ！

えっ？ ちょっと待って！

なんで18の大の男をうちで引き取らなきゃいけないわけ？

「あの、18なんですよね」

私は役所の人に取り押さえられても私の方に来ようとしてる男を指差した。

「はい」

「ふつう18っていったら、一人で充分働いて暮らしていけますよね」

「はい、ふつうはそうです」

「だったらなんでうちで引き取る必要があるんですか！

一人で暮らせるじゃないですか！ どう見ても立派なおとなでしょ！」

「透くんは...ふつうじゃないんです」

「ハ？」

「いわゆる知的障害者なんです」

「へ？」

私は恐る恐る役所の人の方の後ろの男を見た。

私を見てニコッと笑ったあつ。

ウッソーーーーー！

「あ、あの、だ、だったら、そういう施設に入った方がいいと思うんですけど」

「そうなんです、今どこも定員オーバーで入れないんです」

「ウッソーーーー！」

「いえ、本当です」

クソまじめな顔で返事しないでよおおお。

「それに遺言状があるんです」

役所の方は胸ポケットから古ぼけた封筒を取り出した。

「透くとあなたのお父さんの遺言です」

私は封筒から黄ばんだ便箋を出した。

『遺言状』

こんな字書く人だったんだ…。

『もしも、透に身寄りがなくなった場合、花村の家で引き取っていただきたく、
勝手な願いながら、なんとかよろしくお願ひしたい』

ほんとに勝手よ。

私とお母さん捨てて出ていったくせに…。

今度はこんな子押しつけて…

「あなた方のお父さんは6年前に亡くなりまして、そのあと、すぐに透くんの
お母さんも亡くなって、ずっと母方の祖父に育てられていたんです」

だからなによ、私だっておばあちゃんと二人きりよ。

「もちろん役所としても、施設が空きしだい透くんをそちらに移すということも」

「え？」

「まあ、花村さんしだいですけど」

「そ、そうしてください」

「そうですか、わかりました、手続きしておきます」

よかったあ。

「ただ、それまでは花村さんに預かっていただきたいんです」

「え…」

「実はこの家も借家でして、大家が取り壊してアパートを建てるそうなので、
だいぶ前から立ち退きを要求されていたらしいんです。

ですから、もうここにいることができないんですよ」

「そう…ですか…あの…それで…いつ引き取りにすれば…」

「今日です」

「ヘッ？」

「明日には解体屋が来て取り壊すそうなので」

ちょ、ちょっと待ってよ、まだ心の準備ができてないよおおっ！

「透くん、荷物持って」

トオルくん・・・とやはは、ニッコリ笑って奥から汚ったないリュックを持ってきた。

「あの、荷物ってこれだけなんですか？」

「タンスとちゃぶ台と布団がありますが、持っていきますか？」

「い、いえ、いい…です」

ハアアアアアア… ため息出ちゃう。

「それじゃ、透くん、いい子にするんだよ」

「ダイジョーブ！ 俺がジュリアを守るから！」
ハアアアア... わけわかんないこと言ってるし。

バスの中。

となりに座ってる“透くん”...

膝にデッカイツギはぎしてるダボタボのズボン...

ダボダボなのに丈が短くてスネが見えてるし、穴の開いた汚ったないズック、
何百回洗ったの？ってくらい薄す～くなったアンパンマンのプリントの薄汚れたTシャツ、
髪はボサボサに伸びて、顔も手も汚くて...

楽しそーに、足なんかブラブラさせちゃって...

こりゃ、誰が見ても...だよ。

突然、透くんがニューツと私の顔を下から覗きこんでニッコリ笑った。ギョッ！

「やっと会えたね」

私は別に会いたくなかったわよ、てか、あんたなんか知らなかったし。

「俺、ずーっとジュリアに会いたかった」

ほら、またわけわかんないこと言ってるし。

「ジュリアも俺に会いたかった？」

「あのね」

私は園児に話すように言った。

「私の名前は洋子なのよお、わかるかなあ？」

「うん、わかってるよ」

なんだ、それくらいは理解できるのね。

「ほんとはジュリアなんだよね」

わかったらーん！

お母さーん！ たすけてよおおおおおつ！

台所のテーブル。

おばあちゃんと私...

そして、口ポカンと開けて物珍しそうに部屋の中をキョロキョロ見てる“透くん”。

「18とはねえ」

おばあちゃんはキョトンとした顔で言った。

「昨日ちゃんとおばあちゃんに話したって言ってたわよ！」

「だってさあ、突然のことだったからビックリしちゃって何言われたのか忘れちゃったのよ」

「そりゃそうだけど、でもさあっ」

そう言いながら横に座ってる“透くん”をチラッと見ると、私の顔見てニタ～ッて笑ったよお。

「それに」

私はおばあちゃんに顔を近づけた。

「知的障害者なんだよ？」

「かわいそうだねえ」

「じゃなくてっ！ 18の知的障害者なんかどーすんのよおっ？」

「どうするって、あんた連れてきちゃったんだから」

「そ、そうだけど、ていうか、今日連れてってくれって言われちゃったんだもん！」

「だったら、うちで面倒みるしかないだろ」

「そうだけどおおお」

「透ちゃん、お菓子食べるかい？」

「うん！」

おばあちゃ～ん、お菓子なんかあげてる場合じゃないでしょおおお？

おばあちゃんが出したカステラをボロボロこぼしながらバックバク食べてるよ、しかも手で！
幼稚園児だって、もう少しお行儀よく食べるわよ。

「うんめえ！」

あ～あ～あ、口いっぱい入れたままでしゃべるから口からはみ出しちゃって、もう。

「そうかい？ ウフフ、これはおばあちゃんのとっておき、文明堂のカステラだからね」

「おばあちゃん、ありがとう！」

「あらあ、透ちゃん、ちゃんとありがとうが言えていい子だねえ」

18の男つかまえて、いい子もないもんだ、まったく。

「ジュリアも食べる？」

食べかけのカステラをグイッと私の口もとに押しつけたあっ。

「い、いらないわよ！」

「すんげえうめえよ？」

「いらないってば！」

「ジュリア、どうして怒ってるの？」

「ジュリアってなんのことだい？」

おばあちゃんがキョトンとして聞いた。

「知らないわよ！」

「ジュリアは俺のいっちゃん大切な人！ ねえ、ジュリア」

って、私に同意求めないでよっ！

「それじゃ、なに？ 洋子がジュリアなの？」

「うん！」

「へえ、そうなの」

って、納得しないでよ、おばあちゃんっ！

「着替えてくる」

私はおばあちゃんとあいつを置いて、さっさと自分の部屋に行った。

よそいきのスーツ脱いで...

バカみたい、こんないい服着てっちゃって。

ジーパンでよかったよ。

見てよ、押し倒されて後ろが泥だらけになっちゃってるよお、もう。

下着のままで鏡台の前に立つと、あ～あ、このアザがなあ。

胸のちょうど真ん中に斜めに細長くついてる赤紫のアザ。

生まれたときからついてたっていうんだけどさあ、

これがあるから胸がガバッと開いた服が着れないんだよねえ。

ていうか、幼稚園でそんなの着たら、子どもたちに襟元引っ張られてベロ～ンてなっちゃうけど。

それに、そんな服着てデートするあてもないし。

まわりにいる“男”といえるのは幼稚園児だけ。

トホホ、まだ20歳だっていうのにいいい。

...って、そんなことはどーでもいいのよ。

ボタンとベッドに大の字。

ハアアア... どーすんのよ、これから。

18の知的障害者抱えちゃってさあ。

弟...なんて思えないよ。

昨日まで存在だって知らなかったし、それに、突然現れたら、もう18だよ？

18ってことは...

お母さんが離婚したのが私が2歳のときでしょ？

えっ？ 離婚してすぐに生まれたってこと？

てことは... お父さん...浮気してたんだ...

サイテー！

遠くから聞こえる笑い声で目を開けると...

部屋の中が薄暗い...

え... 今何時？

時計を見ると... 6時。

寝ちゃってた。

疲れちゃってたんだよ、疲れるよ、そりゃ。

目をこすりながら台所に行くと、おばあちゃんとあいつが笑いながら何かしゃべってた。

「あら、洋子、ちょっと見てよ」

おばあちゃんがあいつを前に押し出した。

な、なんじゃこりゃ???

「お風呂に入れたんだけどね、パジャマ持ってないっていうから、

死んだおじいちゃんの浴衣着せたんだけどさあ、ちょっと短かったかねえ」

ちょっとどころじゃないよ、腕と脚がニョキッと出ちゃってて、ますますアホっぽい。

「それでね、ちょっとこれ見てごらん」

おばあちゃんがあいつの胸元を開けて見せた。

え？

「ほら、あんたと同じアザがあるんだよ」

うそ...あいつの胸の真ん中...私と同じ赤紫のアザが...

「やっぱり姉弟だねえ、アザまで一緒なんてさあ」

私は思わずあいつの顔を見た...

やっぱり...私の弟...ってことなの...

「ちげーよ、これ、刺された痕なんだ」

「えっ？」

おばあちゃんと私は同時に声を出した。

「誰に刺されたんだい？」

「敵」

あ... あ〜あ〜あ、やれやれ。

「ジュリアのもそうだよ、俺が刺されて、そのあとジュリアも刺されたんだ」

「キ、キモチ悪いこと言わないでよ！」

「あんとき、守ってあげられなくてごめんね」

あいつが悲しそうな顔で言った。

「でも、今度はちゃんと守るから安心していいよ」

「わ〜かったから、ごはん食べて」

まともに相手なんかできないわ、こいつ。

横でクツチャクチャ音立てて、ポロツポロこぼしながらバックバク食べるあいつ。

しかも、お皿に顔近づけて、しかも、握り箸...

年少さん以下だわ、こいつ。

「うんめえ！」

ほらまた口の中にいっぱい入れたまましゃべるし！

「そうかい？ 嬉しいねえ」

おばあちゃんたらニコニコしちゃってるけどさ、

こいつはロクなもの食べたことないだけだよ、ぜったい。

「ほら、洋子も少しはお食べよ」

おばあちゃんはそう言って、豚の生姜焼きを私の方にグイッと押した。

ウッ...

「ジュリアは肉食べれないんだよ」

「えっ？」

な、なんで知ってるの？

「そうなんだよ、小さい頃からお肉だけは食べれなくてねえ、

幼稚園の先生が好き嫌いがあっちゃいけないよねえ」

「だってジュリアはシンカンの娘だから肉は食べちゃいけないんだ」

ハ???

「シンカンって？」

おばあちゃん！ まともに聞いたってムダだよ！

「えーっとね... 忘れた」

ほらね。

後片付けが終わって、おばあちゃんが言った。

「透ちゃん、疲れたろ？ そろそろ寝た方がいいねえ」

「でも、どこに寝かせるのよ？」

「美佐代の部屋が空いてるじゃない」

「えっ？ お母さんの部屋？」

「あそこしかないだろ？」

「だ、だって、お母さんの部屋になんて」

「大丈夫だよ、もう片づけてあるんだから」

「そういう問題じゃないよ...」

こいつをお母さんの部屋に寝かせるなんて...イヤ...

「俺、ジュリアと一緒に寝る」

「ゲッ!？」

「あら、そうするかい？」

「お、おばあちゃんっ！」

「うん！ ジュリアと寝る！」

「ダ、ダメッ！ あんたは、あんたは...お母さんの部屋...でいいから」

おばあちゃんがニタツと笑って、

「はいはい、透ちゃん、今日からこっちがあんたの部屋だからね」

そう言ってあいつをお母さんの部屋に連れていった。

ハ...ハメられた....。

お風呂から上がって、部屋に戻ってすぐにベッドにもぐりこんだ。

疲れたあ。寝よっ。

パチンと電気消して...
トロトロトロ...ト...ロ...

ん...誰か...入って...きた...おばあちゃん...?

目を開けると、

「キャー——！」

あ、あいつが、あいつがああああああっ！

「な、な、なによっ!？」

「ジュリア！」

って、ガバツと抱きついてきたあああああっ！

「キャー——！ おばあちゃー——ん！」

「おばあちゃんじゃないよ、俺だよ？」

「わ、わかってるわよっ！ ちょ、ちょっと、離してよっ！」

私は足でバシバシ蹴飛ばして、あいつはやっと離してくれた。

ゼーゼーゼー...

「ジュリア、やっと会えたね」

今度は私の手を握ったよおおおっ！

「俺、ずっと探してたんだ」

「ああ、そうですか、ほら、早く寝なさいよ」

「でも、見つからなくて...」

「早く自分の部屋に戻りなさいってば！」

「でも、ぜったい会えるって思った、だって約束したから」

「わかったから、早く出てってよ！」

「大丈夫だよ、ここにはジュリアのお父さんはいないよ？」

「あたりまえよ！ いいから、早く出て！」

私はあいつの身体をドアまでグイグイ押した。

「もう離れなくていいんだね」

そう言って微笑んだあいつの顔の前でボタンとドアを閉めた。

ま——ったく、冗談じゃないわよ、部屋に忍び込んできて、危ないったら！

弟だからって、もう18で、ずっと離れてて、他人も一緒なんだからね！

ズリズリズリッと鏡台を引っ張ってドアの前に置いた。

よし、これで入ってこれないわ。

カギつけよう。

今までお母さんとおばあちゃんと私だけだったからカギなんてつけたことないけど。
また入ってこられちゃたまんないよ。

バタンとベッドに倒れこんだ。

もうやだあ。

お母さーん、明日起きたら今日のことは全部夢だったことにしてー！

幼稚園

ガバッと跳ね起きた。

まだ心臓がドキドキしてる。

やだ、汗びっしょり...

また見ちゃった...

イヤな夢...ううん...怖い夢...

誰かがいて...そして...目の前が真っ赤な血で染まって...

小さい頃はよく見てた...

怖くてお母さんの布団にもぐりこんだっけ...

最近はずんずん見てなかったのに...

ストレスだ、ぜったい...

それに、あいつが『刺された痕』とかキモチ悪いこと言うから...

ていうか、やっぱストレスだよ。

今何時？

まだ3時じゃ～ん、ああ、もう、寝よっ。

誰かが私の頭を優しく撫でる...

誰...おかあさん...？

ホッとする...いつも...この手で撫でられると...

誰かが...私の名を呼ぶ...そう...私の名前...

呼んでいるのは...

薄っすらと目を開けると...優しい目が私を...

ホッとして...また目を閉じる...

エッ？

目を開けると、すぐ目の前にあいつの顔があああああっ！

「キャーーーー！」

ガバッと飛び起きた。

「あ、あんた、な、なによーーーーっ!？」

「おばあちゃんが起こしてこいって言ったんだ」

おばあちゃーんっ！ こんなヤツに頼まないでよおおっ！

えっ？ ちょ、ちょっと、待って、確かゆうベドアのところに...

ウッソーーーー！ 鏡台が裏返って壁にへばりついてるうううっ！

「あ、あんた、ど、どうやってドア開けたのおおおっ？」

「グッて押して」

「グッてって、こんな重いのを...」

「俺、力強えんだ」

あいつがニコッと笑って言った。

「護衛兵だったから」

朝からこんなこと聞かされる私... どう思う？

「着替えるから出てって」

「うん」

今日は素直じゃん。

「あ、ねえ」

あいつが振り向いた。

「なに？」

私は無愛想な声出した。

「ジュリア、ゆうべ思い出したよね」

「ハ？」

「俺、わかったよ、目が覚めたんだ」

「ハアアアア??？」

もうこいつの世界ってハチャメチャ。

「いいから、早く出てよ」

「うん」

ボタンってドアが閉まった。

お母さーーーーん、昨日のことは夢じゃなかったのねーーーーっ！

トホホ....

「いい？ ゼーったいガスに触っちゃダメよ？」

「うん」

「あと、誰か来ても、ゼーったい出ちゃダメよ」

「うん」

ハアアア... まるで三歳児に留守番させる気分。

「おばあちゃんと私が帰ってくるまで、ゼーったい外に出ちゃダメよ」

「ジュリア、どこに行くの？」

「仕事」

「俺も行く！」

「ダメッ！」

「でも、ジュリアのそばにいなきゃ、俺守れねえよ」

「いいのっ！ あんたはここにいなさいっ！」

「透ちゃん、すぐとなりの幼稚園だから安心していいんだよ、

お昼になったら洋子に顔出させるからね」

「なんでよおっ？ お昼はたんぽぽ組のお弁当の面倒みなきゃならないんだから！」

「佐藤先生にまかせておけば大丈夫だよ」

「佐藤先生はチューリップ組ですっ！」

私はプリプリして家を出た。

「洋子、透ちゃんにもうちょっと優しくしておやりよ」

歩きながらおばあちゃんが言った。

「だって、イヤなんだもん」

「洋子はお姉さんだろ？」

私は思わずおばあちゃんを睨んだ。

「あんなに洋子のこと慕ってるじゃないか、可愛いねえ」

「イヤなものはイヤなのっ！」

「子どもみたいだねえ」

おばあちゃんは笑うけど、だって、本当にイヤ、あんなのが弟なんて...。

お外遊びの時間。

これがまた大変なんだ！

脱走しちゃったり、砂かけあっちゃって目に入って大騒ぎになったり。
たんぼぼさんとチューリップさんの合同だから佐藤先生もいるけど、
佐藤先生はいい年だし、やっぱ新米の私が走らなきゃならないんだよね。
そんでもって私って走るの遅いから、この前なんかマサルくんが園の外まで出ちゃって、
もうタ〜イヘンだったよお。あ〜あ、早く終わらないかなあ。

「洋子先生」

「裕介くん、なあに？ オシッコ？」

裕介くんは恥ずかしがりやで、なかなかオシッコって言えないから、いつも漏らしちゃう。

「あれ、だあれ？」

「え？」

裕介くんが指差す方を振り返って見ると、

「ゲッ！」

あ、あいつが木陰からこっち見てるううううっ！

「ちょ、ちょっと！」

私はあわてて木陰に走った。

「ジュリア！」

ニ〜〜ツコリ笑うけど、

「外に出ちゃダメって言ったでしょっ！」

「だってジュリアを守らないと」

「いいからっ！ 早く帰ってよっ！」

「洋子先生！」

佐藤先生の声。

「は、はい」

「マサルくんがまた脱走しようとしてる！」

「えっ？ ア〜〜〜〜ツ！」

私はあわてて走った。

「マサルく〜〜〜ん！ 戻ってきなさい〜〜い！」

ドタドタ走る私の横をピュー〜ツで、え？ あっ！ あいつ！

「ちょ、ちょっと！ あんた！ 透！」

あいつは園の外に出ようとしてたマサルくんをヒョイツと小脇に抱えて、え？

そのままピュー〜ツと走ってきた。

ホ〜〜…。

「連れてきた」

ニ〜〜ツコリ笑うあいつに抱えられたまま、マサルくんはケラケラ笑ってる。

「あ、そう」

まあ...いいけど...

「よかったわあ、さすが男の人はちがうわねえ」

ギョッ、さ、佐藤先生...!

「この人が洋子先生の弟さんなのね」

「えっ、な、なんで...」

「園長先生からお聞きしたのよ」

おばあちゃ〜んっ、ったく余計なことを...!

「おにいちゃん、名前なんていうの？」

マサルくんがあいつを見上げて言った。

「おぼえてねえんだ」

バ、バカ、もう、

「と、透よ、透おにいちゃんっていうの」

自分の名前もおぼえてないなんて、もうやんなっちゃう。

「トール、遊ぼう！」

マサルくんがあいつの腕を引っ張った。

「マ、マサルくん、ダメよ、おにいちゃんはもう帰らなきゃいけないの」

「えーっ、やだあ、遊ぼうよお」

「うん」

「うんって、あんたっ！」

「いいじゃないの、男の子は男の人と遊びたいんでしょ」

「佐藤先生、でも、あの子は、あの、実は、その、ち、知的障害の...」

「そうですってね」

それも言ったわけだ、おばあちゃんっ。

「でも大丈夫よ、私たちが見てるんだし」

「ハア...」

「ほら、見てよ、あんなこと私たちじゃできないもの」

「え？」

見ると、あいつが背中にマサルくんおんぶして、両脇に二人抱えてグルグル回ってる....。

そりゃ...確かにできない...ていうか、やりたくないし....。

「次は僕！」

「僕も！」

男の子たちが透に群がってる。

透もニコニコしちゃって、遊んでやってるっていうより、一緒になって遊んでるってカンジ。

子どもたちがゲラゲラ笑ってる。

「男の子たちがあんなに生き生きしてるのははじめてね」

佐藤先生が言った。

まあ...ね。

「やっぱり保父って必要だと思うのよ、私は」
でも、あいつは保父っていうより、園児と同レベルってだけで…。

結局あいつは保育時間が終わるまでずーっといた。

子どもたちが離さないんだもん。

お昼は子どもたちが、「トール、あげるよ」って次々とおかずを食べさせて、
透はニコニコして食べてた。

帰りも、みんなが「トールまた明日遊ぼうね！」って、そんでまたあいつも「うん！」って、
明日はないちゅうの！

「明日から透ちゃんのお弁当も作ってあげようね」

夕食のとき、おばあちゃんが言った。

「透ちゃん、明日から一緒に幼稚園に行こうね」

「うん！」

「ちょっと、おばあちゃん！ 何言ってるのよ！」

「いいじゃないか、佐藤先生も言ってたよ、透ちゃんが来て男の子たちが生き生きしたって」

「それは…だけど、何かあったらどうするのよ？」

「大丈夫だよ、他の先生たちだっているんだし、透ちゃんはいいい子じゃないか」

「ジュリア、大丈夫だよ」

「ハ？」

「ジュリアは俺が守るから」

これのどこが大丈夫なのよ…。

「透ちゃんだって一人でずっと家にいるのは淋しいだろうし、そうしよう」

もうっ、私は知らないからね！

お風呂から上がって部屋に戻ろうとすると、ドアの前に透が立っていた。

「な、なに？」

「ジュリア…」

「部屋に入っちゃダメって言ったでしょ！」

「うん、ジュリアがそういうなら入んねえ」

「あ、そう、それじゃ、オヤスミ」

「ジュリア」

「なによっ？」

「おやすみの抱っこしてもいい？」

「え？」

あいつの腕が、そっと私を抱いた。

え...

なにかが...

知ってる...

何を？

わからない...だけど...

「ジュリア...おやすみ...」

聞いたことのある...

いつ...

でも...

私は、ヘンな感覚に怖くなって、透の手を振り払って部屋に入った。

初登園

次の日から、透は私たちと一緒に幼稚園に行くことになった。

んもおおお、私は知らないからね、おばあちゃんが言ったんだからね！

「洋子、透ちゃんに服買ってあげた方がいいねえ」

おばあちゃんが透を見ながら言った。

「持ってきた着替えもシャツ一枚と下着一枚と靴下一足だけだものねえ、
しかも全部擦り切れててかわいそうだよ」

まあ...そりゃそうだけど...

「洋子、今度の休みに透ちゃん連れて服買いに行つてよ」

「エーッ、私があっ？」

「おばあちゃん、若い子の好みはわからないもの」

「私だって男物なんか買ったことないもん」

「いいじゃない、透ちゃんだって街に遊びに行きたいだろうしさ、連れてつておやり」

「やだ！ ぜーったいイヤ！」

やだよ、こんなヤツ連れて買い物なんて！

友だちに会っちゃったりしたらどうすんのよ！ やだやだやだ！

幼稚園の朝は、お出迎えから始まる。

「透はたんぽぽ組の部屋に入つてて」

「うん」

「あ、ちょっと待つて！」

私は透の襟首つかんだ。

「いい？ ここでは、ぜーったいジュリアなんて呼ばないでよ」

「なんで？」

なんでじゃないでしょっ！ だいたい私はジュリアじゃないんだから！

...なんて言ったつてわかるわけないな。

「ここでは洋子先生つて呼ぶの！ それが決まりなの！ わかつた？」

「うん、わかつた」

真剣な顔してうなづくけど、ほんとにわかつてんのぉ？

お母さんに連れられて園児たちがやってくる。

「洋子先生、おはよう！」

「おはよう、ミカちゃん」

どんなときも笑顔。幼稚園の先生の鉄則。

特に朝はグズる子もいるから、とにかく笑顔っ笑顔っ笑顔っ！

「洋子先生、おはよう！」

「マサルくん、おはよう」

「トール来てる？」

「え、あ、う、うん、いるわよ」

「わーい」

マサルくんはそのままたんぽぽ組の部屋に走っていった。

「洋子先生」

マサルくんのお母さんが話しかけてきた。

「はい？」

「男の先生がお入りになったんですか？」

「えっ、あ、そ、それは...」

「ゆうべマサルが言ってたんです、すごく楽しかったって」

「あ...そ...そう...ですか...」

「あの子、上にお姉ちゃんがいるだけで、主人も忙しくてあんまりかまってやれなくて、

ですから男の先生と遊んだのがよっぽど嬉しかったらしくて、ずっとその話ばかりしてたんですよ」

「は、はあ...」

「保父さんなんて珍しいですね」

「あ、いえ、あいつ、あ、や、あの人は...」

「洋子先生の弟さんなんですよ」

横から佐藤先生がニコニコして言った。

「あらあ、洋子先生の弟さんなんですか」

マサルくんのお母さんはニッコリ笑った。

「は、はあ...」

「それならますます安心だわ」

あんまり...安心しない方が...いいと思いますけどおおお...

「それじゃ、みんな来てるか、お名前呼ぶから大きくお手々あげてお返事してね」

「はーい！」

「アサミちゃーん」

「はい」

「アキヒサクーン」

「アイーン」

「アイーンじゃないでしょ、はいでしょ？」

「はい」

「いい子ね、次はカズミちゃん」

...と、まあ、出席取ることから始まるわけ。

「はい、みんないるわね、それじゃ今日は...」

「洋子先生！」

マサルくんが手をあげた。

「なあに？」

「トールがまだだよ」

「ハ？」

「トールの名前も呼ばなきゃ」

「え、いや、透は、じゃなくて透おにいちゃんは...」

「ほらあ、早くう」

「え...」

まったくもう、しょうがないなあっ。

「透...くん」

「はい」

ニコニコして手をあげちゃって、あんたは園児かっちゅうの！

まずはお絵かきの時間。

「えっと、今日はね、みんなの...」

「ヨーコセンセ！」

え？ と、透っ、なんなのよっ？...じゃなくて、笑顔笑顔...

「な、なあに？」

顔引きつってるよ。

「俺、オシッコしてえ」

「ハッ？」

「も、もれそう」

なに———っ!?

まったく、あんたにかまってる余裕はないのよっ！

「オレも！」

マサルくんも手を上げた。

「ボ...ボクも...」

「え？」

裕介くん... はじめて自分で言った...

「あ、そ、それじゃ、透おにいちゃんと一緒に行ってください」

透とマサルくんと裕介くんが手をつないで走っていった。

あ...そう... いい...けど。

「今日はね、みんなのお友だちの絵を描きましょうね、クレヨン出してね」

私は一人ずつに画用紙を配った。

「洋子先生！ トールに渡ってないよ」

「あ、と、透は...」

「クレヨンもないよ」

まったく、めんどっちなあっもうっ。

私は画用紙と予備のクレヨンを透の前にドンと置いた。

お絵かきの時間は好き...っていうより楽。

子どもたちに絵を描かせて、たま～に回って歩いてチョロツと声かけて...でいいんだもん。

女の子たちはお人形みたいな絵を描いてるし、男の子は、あ～あ、そりゃガンダムだろが！

ま、いっか。

え？

ほとんどの男の子たちの絵...

アンパンマンのTシャツにダボダボの丈の短いスポンの男の子の絵...

これって... 透？

マサルくんのもそう。

でも、ズボンのところに何か描いてる。

「マサルくん、これなあに？」

「トールのチンポコ！」

「ハッ??」

「トールのチンポコ、すんげーデッカイだよ！」

ギャーーーーッ！

「ギャハハハ」

教室中の子がゲラゲラ笑って、も、もう、ど、どうしよおおおっ！

お、落ち着くのよ、幼稚園児はチンチンやウンチにやたら興味を持つ年頃って習ったじゃない。こ、こういうときは...えっと...

「あ、あのね、そ、そういうのは、ちゃんとおズボンの中に隠しましょうねえ」

「は〜い」

マサルくんは口とがらせてズボンと同じ色で塗りつぶした。

ゼーゼーゼー...

ハアアア... もう...

そんで？ 透は何描いてるのよ？ ま、まさか、チン...

あわてて覗き込むと、え... 女の子の絵？

長い黒い髪、青い目、そして白くて長い服...

「トール、なに描いてんの？」

マサルくんが身を乗り出して透の絵を覗いた。

「ジュリア」

ゲッ！

「マ、マサルくん、ほら、ちゃんと自分の絵を描いてね」

「ジュリアってだれだよ？」

「マ、マサルくん、時間なくなっちゃうわよお」

「ヨーコセンセ」

オーーーーマイガーーーーッ！

「洋子先生ってジュリアなの？」

「うん」

「さ、さあ、みんなー！そろそろいいかなあ！」

「エーッ、洋子先生ってジュリアなの？」

「わあ、かわいい名前！」

お、女の子たちまで、こっち来るなよーーーーっ！

「い、いいから！ みんな座って！ そろそろ終わりですよお！」

「ねえねえ、今度からジュリア先生って呼ぼうよ！」

「ミ、ミカちゃん、はい、ちゃんと座ってねえ」

「うん！ ジュリア先生にしよう！」

「ジュリア先生だ！」

「あ、あの、みんな…」

「ジュリア先生！ ジュリア先生！ ジュリア先生！」

みんなで手をたたきながら大コールだよ…

とおる————っ、ブツ殺スッ！！！！

お昼すぎから雨が降ってきたから、自由遊びは部屋の中。

私は女の子たちと折り紙作ってた。

男の子たちはブロック遊び。

透は床に座って… 私のこと見てるよ、やれやれ。

「なんだよお！」

「おまえが悪いんだあ！」

え？

振り向くと、マサルくんとアキヒサくんがブロック投げあってる…！

「あっ、ちょ、ちょっと！ ダメ！ やめなさい！」

あわてて走っていくと、マサルくんの投げたブロックが私の方に飛んできた！

「あっ！」

突然、床に押し倒された。

な、なに？

反射的に顔をあげたら・・・ 透が私の上にいる。

「ジュリア、大丈夫？」

「え、あ、う、うん」

「ア————！ トール、血が出てるう！」

女の子の声に透の顔を見ると、目のすぐ下から血が出ていた。

「あっ…」

ブロックが当たったんだ...

「マサルくん、いけないんだあ！」

「マサルがケガさせたあ！」

みんなが騒ぎ出した。

「み、みんな、静かにして！」

「マサルのバーカ！ マサルのバーカ！」

「みんな、やめなさい！」

マサルくんは真っ赤な顔してくちびる嚙んで立っていた。

「マサルくん、ね、危ないから、もうやっちゃダメよ」

そう言って優しくマサルくんの肩に手を置くと、グイッと私の手をふりほどいた。

あ... すねちゃったよ。

「マサルくんだってわざとやったんじゃないのよね」

マサルくんは足元のブロックを思いっきり蹴り始めた。

「マ、マサルくん！ ダメよ！ 危ないからやめなさい！」

そのとき、透が飛んでくるブロックよけながらマサルくんのそばに行って、そして、ギュッと抱きしめた...

マサルくんの顔がクシャクシャに歪んで...

「ウワーーーーーン」

透に抱きついて大声で泣き出した。

透は...黙って...マサルくんの頭を優しく撫でて...

「ト...ヒック...トール...ヒック...ごめ...ヒック...んね...ヒック...ごめんね...ヒック...」

透はマサルくんの顔を覗き込んで微笑んだ。

「マサルは俺の友だちだもん、俺の絵描いてくれたもん」

「うん、ヒック」

「俺のチンポコも描いてくれた」

「アハ...アハハ」

マサルくんが笑った。

私は... なんだか... なんていうか...

ただ... 二人のことを見ていた。

変身

「透ちゃん、今日はえらかったんだってねえ」

夕食を食べながらおばあちゃんが言った。

「佐藤先生が言ってたよ、抱っこしてあげるなんて、よく思いついたね」

透はバクバクごはんを口に詰めながら、

「ジュリアが俺にやってくれたんだ」

ハ？

「洋子、そうなのかい？」

「や、やってないよ」

「やってくれたよ」

「やってないわよ！」

「俺、憶えてるよ、俺が仲間とケンカして、ケガさせて、みんなが俺のこと怒って、
そんなときジュリアが来て、みんなの前で俺のこと抱きしめてくれたんだよ」

「そんなの知らないわよ！」

「ほら、俺が護衛兵になったばっかの頃」

あ～あ～あ、まただよ…。

「俺、やめさせられるって思ったのに、ジュリアはなんにも言わないで抱いてくれて、
俺、すげえホッとして、嬉しくて、泣きたくなくて、俺、ぜってえこの人を守る、
俺の命かけて守るって思ったんだ」

「いい話だねえ、グスッ」

「おばあちゃん！ 透の作り話だってば！」

「作り話じゃないよ」

「あっ！ それって、あんたのお母さんなんじゃないの？」

「ちがうよ、ジュリアだよ」

「ああ、そうですかっ」

もういいや、どうでも。

でも…

たしかに今日、透は私のこと守ってくれた。

あのとき透が私をかばってくれなかったら、ブロックは私の顔に直撃してたはず。

ちょっと…見直した…り…して…。

ちょ、ちょっとだけだけどさ。

お風呂から上がると、透がまた私の部屋の前に立っていた。

目の下のバンドエイド...

私をかばってできた傷...

ありがとう...って言おうとして...

でも...なんか...言えなくて...

透がそっと私を抱きしめた。

なぜだろう...

なぜか懐かしくて...

弟だから？ 血がつながってるから？

「ジュリア、おやすみ」

耳元で囁く声も...

そして...

少し悲しくなるのは... なぜ？

次の日の朝、佐藤先生が大きな紙袋を二つ、ドンッと職員室の私の机の上に置いた。

「洋子先生、これ、透くんにあげて」

「え？」

「うちの息子の服なの、昨日、園長先生が透くんの服がないっておっしゃってたから、
息子が着なくなったのを持ってきたのよ」

おばあちゃんっ！ そんなこと人に言わないでよおおおっ。

「息子も高校でバスケやってるから、透くんと同じくらい背が高いの、
だからサイズは合うと思うんだけど」

「あ... す、すみません...」

「いいのよ、うちに置いておいたってしょうがないし、着てもらえるんなら嬉しいわ」

「そ、それじゃ、お言葉に甘えて... いただきます...」

「こっちは下着なの、あ、でも一回も着てないのよ、私を買ってくるのはダッセーとか言って」
佐藤先生は笑いながら、トランクスを引っ張り出して見せた。

あ... 高校生にピカチュウは... たしかに...

でも、あいつなら喜びそう。

「ねえ、今日は午前保育だから、終わったら透くんに着せてみない？」

「え？」

「そうね、見たいわ」

よ、吉田先生まで...

まあ...いいけど....

保育が終わった後の職員室。

「これとこれなんかいいんじゃない？」

「あら、こっちも若者らしくていいわよ」

ポッカーンと突っ立てる透を囲んで、佐藤先生と吉田先生が異様に盛り上がってる。

「髪もちょっとなんとかした方がいいわよね」

「私が切りましょうか？ いつも息子たちや主人のやってるからできるわよ？」

「あら、吉田先生そうしてくれる？」

「あんまり短くしない方がいいわね」

「そうね、その方が透くんに合うみたい」

やれやれ、そんなに盛り上がったってたいして変わらないと思うけど、まあ好きにして。

「掃除してきまーす」

私は職員室を出た。

誰もいない教室。

昼間の騒々しさが嘘みたいに静か。

時々自分が一人ぼっちみたいな気持ちになる。

小さい頃からそうだった。

確かにお母さんは働いてたけど、おばあちゃんがいたし、

お母さんだってすごく優しく、淋しい思いはしてないはずなのに....

友だちといってもそうだった。

すごく楽しいのに、突然一人ぼっちみたいな気がして....

一人っ子だから？

そうかも。

でも、弟がいたんだよね…。

でもさあ、弟って気がしないよ、ずっと離れてたし、知らなかったし、それに…

「洋子先生、できたわよ」

佐藤先生が迎えに来た。

職員室のドアを開けると、

え？

真っ白なTシャツにジーンズの…

こ、これって… 透？

「どう？ かっこよくなったでしょ？」

ボサボサだった髪がきれいにカットされて…

どう見てもそれは…ふつうの18の男の子で…

ううん…ふつうっていうより…どっちかっていうと…あの…すごく…かっこよくて…

ウッソ—————！

「洋子先生ったら、ポーッと見とれちゃって！」

「え、あ、べ、べつに、見とれてなんか…」

しかし…これは…黙って立ってたら…すっごいモテるだろうなあ…。

「ジュリア、このパンツおもしろえよ！」

ニコニコ笑って、ジーパンからピカチュウのトランクス引っ張って見せた。

だからあっ、黙ってろって！

「透ちゃん、よかったねえ」

おばあちゃんがニコニコして言った。

「すっかり男前になっちゃって！」

「おばあちゃんたら、透に服がないなんて佐藤先生に言わなくてもいいじゃないよお」

「なに言ってんの、おかげであんなにいっぱいもらえたんだからよかったじゃないか」

「そう...だけどさあ」

私はチラッと横目で透を見た。

にぎり箸で顔をお皿に近づけてポロポロこぼしながらバックバク食べてる。

あ〜あ、中身は変わらないんだよね。

お風呂から上がって部屋に行くと、またまた透が部屋の前に立っていた。

はいはい、オヤスミの抱っこね。

こざっぱりしたTシャツと短パンの透が私に向かって腕を広げる。

そのとき...

一瞬...

透の顔が...

栗毛色の髪...

緑の瞳...

エッ？

瞬きしてもう一度見ると、透の顔に戻ってた。

な...なんだろう...今の...

透がそっと私を抱きしめる。

なぜか...ドキドキして...

バ、バカじゃない...

透だよ、弟の...

でも...さっきの顔...

どこかで...見たことがある...

どこで...？

「ジュリア、おやすみ」

耳元で囁くこの声...

ううん...この響き...

もっと...ずっと前から...

透がゆっくりと腕を離した。

私は透の目を見つめた...

いつもの透の目...

愛しそうに私を見つめる目...

どこかで...

私は落ち着かなくなって、急いで部屋に入った。

透の物語

次の日から、透は女の子たちにもモテモテになった。

「トール、かっこいい！」

「アタシ、トールのおヨメさんになりた〜い」

透の腕にぶら下がってクネクネしちゃって、女の子ってませてるわぁ。

「おまえら、どけよ！ トールはオレたちの仲間なんだからな！」

「そんなの決まってないも〜んだ」

「決まってんだよ！ トールは男だからオレたちの仲間だよ！」

透を巡って男の子と女の子の略奪合戦が始まったよ、こりゃ。

「トールはどっちが好き？ オレたちだよな」

「ちがわよ、アタシたちだよね」

透はキョトンとした顔して、

「俺はみんな好き」

おお、模範的答えだ、よしよし。

「でも、いちばん好きなのはジュリア」

お、おい...！

「うわあ、トールとジュリア先生ってコイビトなの？」

「うん！」

ちがうだろっ！

「キャー——！ それじゃケッコンするの？」

「うん！」

ア——ホ——か————っ！

「トールとジュリア先生のケッコン式やろうよ！」

「うん、やろうぜ！」

「ちょ、ちょっと！ ちがうのよ！ 透おにいちゃんはね、先生の弟なの」

「え？ そうなの？」

「そうよ、だから結婚はできないのよ、わかる？」

「ちがうよ、俺、ジュリアの弟じゃ...、ウグツ」

ニーツコリ笑いながら透の口を手でふさいだ。

「さあ、今日はお話の時間ですよお」

「それじゃ、今日のお話はぐりとぐらで一す」

「エー——ッ、やだそれえ！」

や、やだって言ったって...

「あきちゃったよお」

「そ、それじゃ、どれがいいかなあ？」

私は本棚から何冊か絵本を出してきた。

「それぜ〜んぶ読んじやったもん、つまんな〜い」

んなこと言ったって、予算がないんだから新しい本がないのよっ！

...なんて言ったってわかるわけないか...

「トール、なんかお話してよ」

ハ？

「トール、お話して！」

おいおい、透にできるわけないだろがっ！

「いいよ」

おいっ！

みんなが透を真ん中にして円になって座っちゃった...

い、いったい何を話すっていうの？ ムリだよおおお。

「俺ね、奴隷だったんだ」

ア————ッ、始まっちゃったよおおお！

「あ、ね、ねえ、みんな、となりの組からご本借りてくるから...」

「ドレイってなあに？」

私の話なんか聞いてないよ...

「馬や牛みたいに買われて働かされるんだ」

「エー——ッ？ ひっど〜い！」

「疲れて休むと殴られて、死ぬまで働かされるんだ」

「かわいそう！」

「でも、ジュリアのお父さんが助けてくれた」

「ジュリア先生のお父さん？」

「うん」

なわけないじゃん...私とお母さん捨てたあの人が....

ていうか、奴隷なんて今どきいないってば！

「ジュリア先生のお父さんってえらいんだねえ」

「うん、すごくえらい人なんだ」

透にとって...お父さんは...そういう人だったの？

「俺は力が強くて、走るの速いから、ジュリアの護衛兵に雇われたんだ」

「ゴエイヘーって？」

「ジュリアのことを守るんだ」

「カッコいい！ ヒーローみたいじゃん！」

「はじめてジュリアを見たとき、俺ビックリした、すんげえきれいで」

え？

「うん、ジュリア先生ってきれいだよね」

「うん、すごくきれい！」

み、みんな、そう思ってくれてたの？ なんか、ちょっといい気分、フフッ。

「でもドジだよねえ、ギャハハ」

ド、ドジは余計よっ！

「俺、ジュリアのそばにいられるだけで嬉しかった」

透の目はどこか遠くを...ううん...自分の中に入っているような目で...

「仲間からはイジメられて、いつも一人ぼっちだったけど、ジュリアのそばにいれるなら、そんなことどうでもよかった...」

「なんでイジメられたの？」

「俺が奴隷だったから」

「ひどーい！」

「トール、オレたちはトールのことイジメないよ！」

「トールはボクたちの仲間だよ！」

「アタシたち、トールのこと大好きだからね！」

みんながトールに抱きついた。

透は嬉しそうに微笑んで、みんなを抱えるように抱いた。

透は...透の頭の中の物語の世界に住んでいて...

それはつまり知的障害っていうことで...

でも...子どもたちは透の物語を自然に受け入れて...

透を受け入れて...

私は...

ひとり取り残されたような気持ちで・・・ みんなを見ていた。

お風呂から上がって部屋に行くと、いつものように透が立っていた。

「ねえ、ちょっと来て」

透は興奮した顔で私の手を引っ張った。

「な、なに？」

私は手を引っ張られたまま、お母さんが使っていた部屋に連れていかれた。

「ほら、見て」

透は窓を開けて、上の方を指差した。

「え？」

窓から顔を出して見ると、

あ... 満月...

「月だよ」

「そうね、きれい」

丸い月が白く輝いている。

「約束したよね」

「え？」

「もしもはなればなれになっても、月を見ようって、はなれてても同じ月を見ていれば、

きっと淋しくないって、同じ時間に同じ月を見てるから」

透はウツリと月を見ながら...

「俺、いつも月を見てた、きっとジュリアも見てるんだって思って、そう思うと淋しくなくなるんだ」

透の物語は美しすぎて...なぜか悲しくなる...

「だから、俺、月が出てないときは悲しかった」

そう言って私の顔を見て微笑んだ。

「でも、今はそばにいるから、月が出てなくても悲しくねえよ」

透...

「俺、これからはずっとジュリアのそばにいれるんだよね」

透の中の物語はどこからきたの？

どうしてその中にいるの？

「ずっとジュリアのこと守るよ」

透の中のジュリアは、本当は誰なの？

「ジュリア...」

透が優しい眼で私を見つめる...

「大好きだよ」

その目は...

私ではなくて...

「透... ジュリアって... 誰？」

透が一瞬、え？って顔して、

「ジュリア、どうしたの？」

そう...よね、透は私がジュリアだって思い込んでるんだもん。

「それじゃ、私がジュリアなんだとしたら、透の名前はなによ？」

透の顔が苦しそうに歪んだ。

「憶えてねえんだ」

ほらね、私もバカみたい、そんなこと聞いたりして。

「ごめん...俺...」

透は暗い顔して下向いた。

「あ、い、いいのよ、気にしなくて」

「でも...」

「大丈夫、大丈夫、ちゃんと私がおしえてあげるから、ね？」

「ほんと？」

透の顔が輝いた。

「いい？ あんたの名前は透、と・お・る」

透の顔がまた曇った。

「ちがう」

「ちがわないのよ、あんたの名前は本当に透なの」

「ちげーよ！」

あ、ど、どうしよう、へんなところ刺激しちゃったかな...

「ご、ごめんね、あの、もうその話は...」

「いいんだ」

透が淋しそうに微笑んだ。

「だってジュリアは俺の名前呼んじゃいけねえんだもんな」

「え？」

「だから今はとおるでもいいよ」

「え、あ、そ、そう...」

なんかよくわかんないけど、納得はした...みたい...ね。

「あの、それじゃ私寝るから」

「うん」

って、なんでついてくんのよ？

「いいから、あんたももう寝なさいよ」

「部屋までちゃんと送るんだ」

あ、そ。

私の部屋の前にきて、透が私をそっと抱きしめた。

なんだか毎晩の儀式みたいだな、こりゃ。

「ジュリア、おやすみ」

耳元で囁く優しい声...

だけど...

私は...受け入れられない...

透の物語を...

子どもたちみたいには...

ふたりきりの土曜日

今日は土曜日。

ワーイ！ 休みだあ！

映画でも観に行こうかなあ、それとも買い物？

「洋子、おばあちゃん今日から明日まで園長会議の旅行に行ってくるからね」

「えっ？」

「会議っていても、みんなで温泉でノンビリしてくるんだけどね、フッフ」

「ウッソー！」

「あら、言ってなかったかい？」

「言ってないよお」

「おかしいねえ、言ったつもりだったんだけどねえ、やだね、ボケちゃったかね」

「それよりどうするのよお？」

「何が？」

「透よ」

「あんたがいるから大丈夫だよ」

「エ〜ッ、出かけようと思ってたのにいっ」

「一緒に連れてってあげればいいじゃないか」

「エ〜〜ッやだよお」

「洋子、あんた、お姉ちゃんなんだから弟の面倒見ておあげ」

なによそれ、まるで小学生に言うみたいにさあ。

「それじゃ行ってくるからね、透ちゃん、あとは頼んだよ」

「うん！ 俺、ちゃんとジュリアを守るから大丈夫だよ」

「さすが男の子は頼もしいねえ」

二人ともなに言ってんだか…。

やれやれ、せっかくの休みに透と二人きりかあ。

しょうがないから洗濯と掃除することにした。

「透は洗濯やってね」

「うん」

「うんって、あんたやり方わかってる？」

「わかんねえ」

これだよ。

「ここに洗濯物を入れて、洗剤をキャップ一杯入れて、フタを閉めて、このボタン押すの、わかった？」

「うん」

「ピーピーって鳴ったら終わりだから、そしたら干してね」

「うん」

家中を掃除機かけなきゃ。

なんせ掃除できるのって休みの日だけだもんね。

しかし、この家も古いよねえ。幼稚園と一緒に建てたから築40年だよ？

でも、新築するほどお金ないしねえ。

台所と、仏間のおばあちゃんの部屋と、私の部屋と透の部屋...

あれ？ 透は？ トイレにもいないよ？

えっ、どこか行っちゃった？

まさか...って、お風呂場覗いたら、洗濯機の前に座ってるよお。

終わるまで待ってるつもりなのおっ？ ま、いいけど。

掃除完了！

あ——、疲れたあ。

透はちゃんとやってるかなあ？

縁側の外の物干し場を覗くと、あ～あ～あ、グシャグシャのまま干してるよ。

「透、こうやってパンパンってやってたから干すのよ」

「うん」

顔真っ赤になるくらいパンッパンッパンッ！って、

「そ、そこまで叩かなくてもいいわよ」

真剣な顔して洗濯物干してる透の横顔...

こうやってると、フツターの男の子なんだけどなあ、ていうか、かっこいい方だよ。

ていうか、かなりかっこいいよ、どっちかっていうと好み...って、バ、バカじゃない？

弟だよ、弟っ！

でもさあ、ふつうならカノジョとかいる年頃で、今頃洗濯物なんか干してないで、デートとかしてるよね。

そうえば...

透って、女の子に興味あるのかなあ？

ないね。頭の中で作ったジュリアって子に恋しちゃってるんだもんね。

アイドルに恋するより不毛だよ。

でも... ある意味シアワセかも...

ふつうの女の子じゃ相手にしてくれないだろうし....。

あっ！

「そ、それはいいから！」

私はあわてて透の手から私のブラジャーを引ったくった。

い、いくら弟でも、これは...ね。ゼーゼー...

お昼食べて...

なにしよう...

な〜んにもすることないなあ。

「透、あんた、なんかしたいことある？」

「ジュリアのそばにいたい」

あ、そ。

テレビでも見るかあ。

仏間兼おばあちゃんの部屋で、透と二人でテレビを見てる私。

休みの日にデートする相手もないなんてさあ。

やっぱ幼稚園の先生って出会いがないもんねえ。

佐藤先生や吉田先生はどうやってご主人と知り合ったんだろう？

お見合い？ お見合いはやだなあ。

「ジュリア」

「ン？」

「抱っこしてもいい？」

「え？」

透は私を後ろから抱きしめた。

ドッキーーーン！

バ、バカじゃない、何赤くなってんの、透だよ、透！ 弟だよ！

な、なんていうの？ 園児がよく後ろから抱っこしてくるじゃない、あれだよ！

でも...

こうしてると...なんか...安心する...

お父さんの膝の上で抱っこされながらテレビ見るって、こんなカンジなのかなあ。

私は少しだけ身体を透にもたれかけた。

もしも...私たちが一緒に育ったんだとしたら...

こうやって一緒にテレビ見てののかも...

お母さんが出かけてても...二人なら淋しくなかったのかも...

そんなこと...ぜったいありえないことなんだけど...

晩ごはんはお母さん直伝の卵丼。

お肉が食べられない私のためにいつも作ってくれたっけ。

透は、相変わらず握り箸でボロボロこぼして、あ～あ。

「透、お箸はね、こうやって握るの」

園児に教えるように透の指をつかんで、

「こっちはお父さん指の間に入れて、お姉さん指と赤ちゃん指で支えて、

こっちはお父さん指とお母さん指とお兄さん指で持つの」

透の手は痙攣した手みたいに突っ張らかっちゃって、あ～あ。

「俺... こっちなら...できんだけど...」

「え？」

透がお箸を左手に持ち替えた。

あ... ちゃんとなってる...！

「あんた、左利きだったの？」

透は叱られた子どもみたいな顔でチラッと私を見て、コクンとうなずいた。

「だったら左手使えばよかったのに！」

「でも...左で食うと...じいちゃんにぶったたかれっから...」

「え？」

「左手使うからバカになったんだって」

昔の人って、そういう迷信信じたりしてんのよね。

「そんなの嘘だからね、いいから左手使いなさいよ」

「いいの？」

「うん、今は左利きの子はそのままにしておいた方がいいって言われてるんだから」

おお、児童心理学の授業のたまものなあ。

透は嬉しそうに左手でごはんを食べだした。

今度はちゃんと食べれてるよ、バックバク食べるのは変わらないけど。

でも...かわいそう...

いくら知的障害者だからって、利き手を使わせてもらえないで、

左手使うからバカになったなんて言われてたなんて...

お風呂から上がると、恒例の透との抱っこタイム。

「ジュリア、俺、今日すげえ楽しかった」

「え？」

「ずっとジュリアと二人でいられた」

それだけで楽しかったなんて...

なんか...ちょっと胸がキュンとした...

「ジュリア、おやすみ」

耳元で囁く声が...なんとなく...愛しく感じた。

姉弟

ガシャーーンという物音で目が覚めた。

何時？ まだ夜中の一時。

透かな？

でも、何か割れたような音だったよね。

なんだろう？

起き上がって物音のする台所に行った。

真っ暗な中で物音がする。

パチンと電気をつけると、何かがサッと物陰に隠れた。

「だ、だれ？ 透？」

突然、見知らぬ男がヌッと現れた。

「ヒッ...！」

「声出すとぶっ殺すぞ！」

男が包丁を持ってゆっくりと私の方に歩いてきた。

に、逃げなきゃ...でも...あ、足が動かない...

「金はどこだ？」

男の手に握られてる包丁がキラッと光った瞬間...

目の前が真っ赤になった...！

あ、あの夢は、正夢なの？ わ、私、殺されるの？

「早く金出せ！」

男が包丁を私の喉元に突きつけた。

思わず目をつぶった...怖くて...声も...出ない...助けて...誰か助けて...！

「ウグッ！」

え...？

恐る恐る目を開けると、あっ！ と、透！

透が、後ろから泥棒の首を腕で絞めて、

「ジュリア！ 逃げろ！」

「え？ だ、だって...」

透に押さえられたまま男が包丁振り回した。

「キャー！ と、透！ 危ない！」

透と男が格闘しはじめた。

え、えっと、ど、どうしよう、あっ、け、警察...！

私は震える手で受話器を取った。

警察が来る前に、男は透に床に押さえ込まれていた。

警官が男に手錠をかけて連れていった。

警官たちが家の中を現場検証してる間も、私はボーッと立っていた。

「台所の窓ガラスを割って侵入したようですね」

「そう...ですか...」

「盗まれた物はないですか？」

「はい...」

「あいつは常習犯でね、数日前も強盗に入って一人殺してるんですよ」

ゾツとした...私も...そうなるかもしれなかったんだ...

「お手柄でしたね、お兄さん...ですか？」

「いえ...弟です」

「すごいなあ、あいつ空手二段なんですよ、ふつうじゃ取り押さえられない相手ですよ」

警官はそう言って笑った。

警察が帰って、シーンとなった家の中。

急に力が抜けて、ヘナヘナと床に座り込んでしまった。

「ジュリア？」

透がしゃがみ込んで私の顔を覗いた。

透の顔を見たら、急に涙が出てきて、

「こ...怖かったあ...」

私は透に抱きついて泣いた。

「もう大丈夫だよ」

透は私の頭を優しく撫でた。

「ヒック...あの...とき...とお...ヒック...透が来なかったら...ヒック...私...こ...殺されてた...」

「ぜってえそんなことさせねえよ」

もしも...透がいなかったら...この家に来なかったら...私は...

「透...ヒック...ありがとう...」

「俺はジュリアのこと守るよ、ぜってえ守るよ」

「透...透...」

私は透の腕の中で、ずっとずっと泣いた。

泣きやんで顔を上げると、透が優しい目で私を見ていた。

私はちょっと恥ずかしくなって、目をそらして、ふと透の腕を見ると、血が出てる！

「と、透、あんた、ケガしてる！」

透はチラッと自分の腕を見て、

「なんともねえよ」

そう言って笑った。

「なんともなくないわよ！」

私は救急箱を出して、透の腕の傷を消毒した。

よかった...あんまり深くない...

「ごめんね」

私は包帯を巻きながら言った。

「私のためにこんなケガさせちゃって」

「こんなん、なんともねえよ、俺はジュリアを守るんだ」

そう言って微笑む透...

「俺、ジュリアのためなら死んでもいいよ」

そんな優しい顔で微笑みながら...そんなこと言わないでよ...涙が出そうになるから...

「ジュリア、おやすみ」

部屋の前でいつものように抱かれて、私は一人で部屋に戻った。

ベッドの中に入って...

なんか...まだ怖い...一人でいるのが怖い...

私は部屋を出て、透の部屋に行った。

「シュリア、どうしたの？」

透がポカンとした顔で私を見た。

「あの...ね...あの...怖い...一人でいるのが...怖くて...」

透が微笑んだ。

お母さんが使ってた布団の中で、透に抱っこされながら二人で寝た。

「ねえ...どうしてあのとき来たの？ 透も物音聞いたの？」

「血を見たんだ」

「え？」

「そんで目が覚めたら、なんか声が聞こえて、そんで」

「血って？」

「ジュリアも見るヤツ」

「えっ？」

「ジュリアが見ると、俺も見るんだ」

それって...あの血の夢？

「小さいときはよく見てたよ、そうずっと、どこかでジュリアが思い出してるってわかったんだ」

「思い出すって...なにを？」

「俺とジュリアが殺されたとき」

透の世界の物語...

だけど...

私たちは...同じ夢を見ていた...同じ夢でつながってた...血の夢で...

そして...半分の血で...

透が来て...はじめて...弟がいるってことが嬉しくなった...

血のつながった私の弟...

私たちは同じ血でつながってる！

小さい頃、おかあさんに抱っこされて寝た布団で、透と二人抱き合って眠った。

カーテンから漏れる明かりで、まだ重たい瞼を開けると、透が私を見つめてた。

「なんだ...起きてたの？」

あくびしながら聞くと、

「ジュリア、可愛い」

透が微笑んでギュッと私を抱きしめた。

「ジュリアの眠ってる顔、すんげえ可愛い」

「な～に言ってんのよお」

とか言いながら、悪い気はしなかったりして、へへ。

「ジュリアと一緒に寝るのはじめてだね」

「そうだね」

ていうか...

弟でも、男と名のつく人と一緒に寝るなんてはじめて...。

小さい頃お父さんと一緒に寝たなんてことはないし。

短大のときにチラッとつきあった人ともない。

そうなる前に別れちゃったんだもん。

だから...

実は...まだ処女...。

20歳で処女... どう思う？

でも、姉弟で一緒に仲よく寝るっていうのもいいなあ。

もしも私と透が小さい頃から一緒に育ってたら、きっと一緒に寝てたんだろうね。

「今何時？」

「わかんねえ」

お母さんの部屋の壁掛け時計... えっ？ もう11時？

「11時だよお、すんごい寝ちゃったあ」

ふと...ゆうべのことが思い浮かんだ...

怖かった...今思い出しても怖くなっちゃう...

でも、透がいてくれたから...

「透、ゆうべはありがとうね」

「え？」

「透がいてくれなかったら、私、ぜったい殺されてたよ」

透が微笑んだ。

「俺、ぜってえジュリアを死なせたりしねえ、二度と死なせたりしねえ」
二度と...ね。

透の世界は二重の世界。現実と頭の中の世界と...

でも、それでもいいや。
それが透で、それが私の弟なんだよね。

カーテンを開けると、すっごいいい天気！
「透、出かけようか！」

にぎやかな遊園地。
「すげえ...」
透は目をパチクリして、キョロキョロとまわりを見ていた。
「遊園地に来たことないの？」
「うん」

お父さん、連れてってあげなかったのかな？
お母さんは休みの日にはたまに連れていってくれたっけ。

「何に乗りたい？」
「え...んっと...馬」
「馬？」
馬って遊園地にはいないよお。
あっ！ ある！

メリーゴーラウンド！
「すげえ！ 馬だ！」
「本物じゃないけどね」
「俺、ずっと馬に乗りたいかったんだ」
「へえ」
「俺、護衛兵でも奴隷あがりだから乗せてもらえなかったんだ」
「えっ？ そうなの？」

...って、なに本気で聞いているのよ、私も。

だってさ、透の物語って、ときどきミョーにリアルなときがあるんだもん。
リアルすぎるから、その世界から抜け出せないのかもしれない。

作り物の馬に乗って、透は大はしゃぎ。

「すげえ！ おもしれえ！」

子どもみたい！ ていうか...子どもなんだよ...中身は...

でも、可愛いかも。

結局連続3回も乗った。

私はもうフラフラ～。

「ちょ、ちょっと休憩しようよお」

透と二人でベンチに座って、ハア～、目が回っちゃった。

「すげえ楽しかった」

ニコニコして言う透... フフフ、可愛い。

「ねえ、何か飲む？」

「あ、うん」

「何がいい？」

「水」

「水なんてないよお、ジュースとか、アイスとかしか売ってないもん」

「ジュリアとおんなじやつ」

透が子どもみたいな顔して言った。

「それじゃ適当に買ってくるから、ここで待ってて」

「俺も行く」

「すぐだから待っててよ、あ、知らない人についてっちゃダメよ？」

「うん」

私は売店に走った。

メロンソーダとソフトクリーム買ってベンチの方に戻ると、あれ？

透の横に二人の女の子... ギャルじゃん。

「ねえねえ、どこから来たのお？」

逆ナンされてるよお！

「あっち」

「やだあ、キャハハハ」

「ねえ、名前なんていうのお？」

「わかんねえ」

「おしえてくれてもいいじゃ～ん」

「ねえねえ、アタシたちと一緒に遊ばな～い？」

「知らねえ人についてっちゃダメって言われてっから」

「やったあ、おもしろ～い」

へえ、いちおうちゃんと会話になってるよお。

「透！」

「あ、ジュリア！」

透が嬉しそうな顔して立ち上がった。

女の子たちはシラ～ツとした顔でベンチから離れていった。

「透ったらモテモテじゃない」

透はキョトンとした顔で私を見た。

「ほら、さっきの女の子たち」

「俺、知らない人だからついてかなかったよ」

逆ナンされたって自覚ないんだなあ...って、まあ、そうだよな。

「うんめえ！」

透は口のまわりクリームだらけにしてペロペロアイスを舐めた。

「あ～あ、もう」

私はティッシュで透の口のまわりを拭いてあげた。

「ジュリアも！」

透がアイスを私の顔の前に突き出した。

私は... パクッて一口かじった。

「うめえ？」

「うん、おいしい」

透が嬉しそうにニッコリ笑った。

私たちって...他の人たちから見たら...恋人同士に見えるのかな...

って、バカじゃない？ 弟だよ、弟！

目の前を通った親子連れを、透が目で追っていた。

私も小さい頃は羨ましかったことがある...

お父さんとお母さんと三人で歩いている子を見ると...

「透は...お父さんと遊びに行ったりしたの？」

「とうちゃん死んだんだ」

「あ、そりゃ死んじゃったけど、生きてたときよ」

「とうちゃん、俺が赤ん坊るときに死んだって」

なに？ またあっちの世界の話？

「そうじゃなくて、私と透のお父さん」

「ジュリアのおとうさん？」

「え、うん、だから、私と透のお父さん」

「あっ！ そうだ！ おじさんはジュリアのおとうさんだったよ」

「おじさん？」

「うん、俺、わかったんだ、おじさんはジュリアのおとうさんだった」

おじさん...なんて思ってたの？ 自分のお父さんを...

お父さんはどんな気持ちだったんだろう...

自分の息子が、自分をおじさんだと思い込んでるなんて...

いい気味...って思う気持ちと...ちょっと...かわいそうって気持ちで...

「ジュリアのおとうさんは俺を助けてくれた」

嬉しそうに話す透...

「ジュリアのおとうさんが、俺をジュリアに会わせてくれたんだ」

そう言ってニッコリ笑う透...

「そうね...」

私は透の手をにぎった。

お父さんをおじさんだと思い込んでる透...

私のことを頭の中の世界で作ったジュリアという女の人だと思い込んでる透...

だけど...

私たちはつながってる...同じ血で...

だから...

透が私をジュリアだと思い込んでても、私たちはつながってられる...

同じ血が流れているから...

透がうちに来て一ヶ月が過ぎた。

幼稚園では、透はもうかかせない存在になっちゃってる。

男の子も女の子も、みんな透と遊びたがった。

特にお外遊びは透が主役。

みんなと一緒に泥だらけになって遊んでる。

私も佐藤先生もボーッと見てるだけでいいんだもん。

おかげで、マサルくんは脱走しなくなったし、裕介くんもお漏らししなくなった。

マサルくんは脱走するより透と遊ぶ方が楽しいみたいで、

裕介くんは、透にだけは「オシッコ」って言えるらしい。

透もね、少しずつ字が書けるようになってきた。

まだ平仮名だけだけど、進歩だよ！

子どもたちが透に教えるの！

子どもたちは、自分たちが先生になってる気分で嬉しいみたい。

家では、透は洗濯係になった。

干すのもだいぶうまくなってきたよ。

私のブラジャーも干しちゃうんだけど、弟だから、いっかあ。

透の膝を枕にして寝転がってテレビを見てると、おばあちゃんが笑う。

「洋子ったら、なんだね、お行儀の悪い」

「だって楽チンなんだもん」

「そんな格好してたらお嫁のもらい手がないよ」

「いいよ、そしたらずーっと透と一緒に暮らすから」

「うん、ジュリアとずーっと一緒にいる」

「あらあら、仲がいいねえ」

私と透はいつも一緒にいる。

小さい頃からずっと一緒にいる姉弟みたいに。

離れていた時間を取り戻すみたいに...

兄弟がいるっていいなあって思うようになったよ。

透がいると心細くない。

一人ぼっちって思わなくてすむ。

透はふつうじゃないけど、でも、もしも小さい頃から一緒にいたら、それが私の弟ってふつうに思ってたかもしれない。

透はお風呂に入っていて、

「透ったら、また穴あけてきたよお」

私はブツブツ言いながら透のジャージの穴のあいた膝を縫っていた。

「透ちゃんは子どもたちとめいっぱい遊んでくれるものねえ」

おばあちゃんがニコニコしながら言った。

「遊んでくれるっていうより、自分が楽しくて遊んでるんだよ」

「それがいいんだよ、だから子どもたちもあんなに喜ぶんだよ」

「そうかもね」

「ねえ、洋子」

おばあちゃんが私の前に座った。

「透ちゃんが来てもう一ヶ月過ぎたよねえ」

「うん、そうだね」

「透ちゃんの住民票、ここに移したらどうかね」

「え？」

「まだ前の家のままなんだろう？」

「うん」

「福祉事務所からは何も言ってこないし、透ちゃんはもううちの家族になってるから、住民票をここに移してあげた方が何かといいと思うんだよ」

住民票をここに移すっていうことは...本当に家族になるっていうこと...

そうだよ、透は私の弟で、私以外身内がいなくて、もうこの家に住んでるんだもん。

「洋子、明日役所に行って手続きしてきてくれないかい？」

「いいけど、明日幼稚園あるじゃない」

「佐藤先生や吉田先生がいるから大丈夫だよ、それに透ちゃんもいるしね」

「なによお、私はいてもいなくても関係ないっていうわけえ？」

「あんたはまだまだペーペーだね」

ウッ... この道50年のおばあちゃんに言われると何も言えないじゃん。

ま、いっか、明日行ってこよう。

透が住んでいた町の役所。

住民票の異動届けだけでいいのかな？

いちおう戸籍も取っておいた方がいいかな？

そうだよ、保険とかそういうのに使うかもしれないし。

私は、住民票の異動届けと戸籍抄本をもらう書類を出して順番を待った。

帰りの電車の中。

私は透の戸籍をじっと見ていた。

なにこれ...

どういうこと...

お父さんの名前と透のお母さんの名前の上に死亡した印のバツ印...

そして、透の名前の下に...

養子...

横に記載されていたものには、透のお母さんは別の人と結婚して透を生んだ。

そして、透が2歳のときに父親が死亡。

透のお母さんが私のお父さんと再婚したのは、透が5歳のとき...

つまり...

透はお父さんの子どもじゃない。

私の弟じゃない。

血がつながってない。

赤の他人。

私は...何をどう考えていいのかわからず...ただ...透の戸籍を見ていた....

台所におばあちゃんと二人。

おばあちゃんは透の戸籍を手にとってジッと見ていた。

「そうだったのかい...」

「そうよ」

「光一さんの子どもじゃなかったんだねえ」

「他人ってことよ」

私はムラムラと怒りが込み上げていた。

「役所の人もいいかげんよね、もっとちゃんと調べてから連絡すべきだよ」

「だって、あんたのお父さんの遺言書があったんだろ？」

「それがおかしいでしょ！」

私は机をバンッと叩いた。

「なんで自分が再婚した相手の連れ子を、自分が捨てた私に頼むわけ？」

「捨てたわけじゃないよ、美佐代とうまくいかなかっただけで、あんたのことは...」

「勝手だよ！ お母さんはずっと一人で一生懸命働いて私を育ててくれて、

なのに、あいつはのうのうと再婚して、その連れ子が知的障害だからって、

なんの関係もない私たちに押しつけて！ 勝手すぎるよ！」

「光一さんだっているいろいろ悩んだんだろうさ」

「そんなの私たちに関係ないよ！ 全部あの人が悪いんでしょ！ あの子のせいだよ！」

「洋子、そんなに怒らなくていいだろ？」

「怒るに決まってるでしょ？ ふつう怒るよ！ こんな、こんなバカみたいなこと！」

「でも、もうしょうがないじゃないか、透ちゃんはここに住んでるんだし」

「私はイヤ！」

「え？」

「もう透と一緒に住めない！」

「洋子、今さら何言ってるの？」

「他人だよ？ なんの関係もない他人！ なんで一緒に住まなきゃいけないの？」

「でもさあ、透ちゃんは他に行く当てないんだから」

「あるよ！ 私、福祉事務所に連絡取ってみる」

「洋子...」

「もうイヤなの！ お父さんの勝手に振り回されるのはもうイヤなの！」

私はそのまま自分の部屋に駆け込んだ。

怒りがおさまらない。

次から次へと湧いてくる。

なんでこんなに怒ってるのかわからないくらい怒りでいっぱいになってる。

弟なんて嘘っぱちだった。

血なんかつながってなかった。

なんのつながりもなかった。

バカみたい！ 私と透にはなんのつながりもないんだよ！

その日、私は透とひとも口をきかなかった。

ききたくなかった。 もう関わりを持つのはイヤ。

お風呂から上がって部屋に戻ると、いつものように透が立っていた。

無視して部屋に入ろうとすると、透が私の腕をつかんだ。

「ジュリア、どうしたの？」

私は透を睨んだ。

「ジュリアってだれよ？」

「ジュリア、どうしたの？」

「私はジュリアじゃないわよ、洋子よ！」

バタンとドアを閉めた。

新しい家

翌朝、出かけようとしていたら電話が鳴った。

「あらら、洋子出てくれるかい？」

「うん」

私は玄関から台所に走って電話を取った。

「もしもし」

「もしもし、花村さんのお宅でしょうか」

「はい」

「こちら青葉学園の事務局ですが、福祉事務所からの依頼の件でお電話しました」

「え？」

「やっと定員に空きができたのでお知らせしようと思ひまして」

「あ... は、はい」

「確認させていただきますが、入園希望者氏名は相馬透さんでよろしいんですよね」

「は...い...」

「明日から入園できますが、どうしますか？」

明日...

「お...お願いします...」

「わかりました、早速手続きしておきますので」

「よろしくお願いします」

タイミングがよすぎて...力が抜ける...

ううん、一ヶ月も待たされたのよ？

そうよ、本当ならもっと早くそうなるべきだったんだから。

いいのよ、これで、いいのよ...。

「明日って...そりゃまた...ずいぶん急だねえ」

園長室の椅子の上でおばあちゃんが戸惑った顔言った。。

「早い方がいいわよ、その方が透だって早く慣れるだろうし」

「そうかもしれないけどさあ...」

おばあちゃんが私をジッと見た。

「なによ？」

「洋子、あんた、本当にそれでいいのかい？」

「いいにきまってるでしょ？」

「あんなに仲よくやってたじゃないか」

「それは本当の弟だと思ってたからだよ、でも他人なんだから」

「なんでそんなに血にこだわるのかねえ」

「あたりまえでしょ！　なんでなんの関係もない他人の面倒みなきやいけないのよ！」

「おばあちゃんは、このまま透ちゃんを置いてあげた方がいいと思うけどねえ」

「私はイヤ！」

おばあちゃんが困った顔して私を見た。

「だいたい透にとってもその方がいいわよ、自分と同じような子たちと一緒にの方が、

それに、ああいうところって職業訓練とか特殊教育とかやってくれるんだから、

透にだって、その方がいいに決まってるわよ」

「そうかねえ」

「そうよ！」

「透ちゃんはどう思うかねえ」

「透なんか関係ないわよ！　ていうか、わかんないわよ！

頭の中の妄想の世界に住んじゃってて、私のことだって架空の女の子と思い込んでて、姉とも思ってなかったじゃない！」

「でも、あんたのことを大切にしてたじゃないか」

「それは、私のことを妄想の中の女の子と思い込んでたからだよ！

透が大切にしているのは、私じゃなくて、透が作ったジュリアっていう子よ！」

おばあちゃんがフーッとため息ついた。

「そうするしかないのかねえ」

「そうよ、それが...いちばんいいのよ」

私は園長室を出た。

晩ご飯。

おばあちゃんはちらし寿司を作った。

ケーキまで買ってきちゃって、お別れ会のつもりなんだよね。

「すげえ！」

透が目を丸くしてテーブルの上を見てる。

「透ちゃん...あの...ね...」

おばあちゃんは目を真っ赤にして、言葉を詰まらせた。

「おばあちゃん、どうしたの？」

透が、ポロポロ涙こぼしてるおばあちゃんの顔を覗き込んだ。

「今日は透の新しい家が決まったお祝いなの」

もう何も言えなくなっちゃってるおばあちゃんの代わりに私が言った。

「え？ 新しい家？」

「そうよ、そこはね、透と同じようなお友だちがいっぱいいて、いろんなこと教えてくれるの」

「すげえ！」

透が嬉しそうな顔をした。

ほらね、透はどこでもいいのよ、この家じゃなくても。

透は嬉しそうにお寿司とケーキをバクバク食べた。

私とおばあちゃんは... ほとんど箸をつけなかったけど...

お風呂から上がると、透はいつものように私の部屋の前で待っていた。

透の腕が私をそっと抱く。

いいわ... どうせ...これが最後なんだから...

私は...透の腕の中で身を硬くした...何も感じないように...

「ジュリア、おやすみ」

この声も...最後...

私は透の顔を見ないようにしてドアを閉めた。

朝になって、荷物を持った透と私は玄関を出た。

「透ちゃん...元気でね...」

おばあちゃんがポロポロ涙をこぼしながら外まで出てきて見送った。

「おばあちゃんは来ねえの？」

「おばあちゃんは幼稚園があるんだよ」

「そっか、そんじゃ先に行ってるね」

「気をつけてね」

「うん！ いってきまーす！」

透はニコニコしておばあちゃんに手を振った。

青葉学園までバスで40分。

透は遠足に行く子どもみたいに嬉しそうな顔で窓の外を見ていた。

「今度から幼稚園にはバスで行くんだね」

「え？」

「新しい家から幼稚園に行くのにバスに乗んねえと」

「なに...言ってるの...幼稚園はもう行かないのよ」

「なんで？」

「なんでって...あんたは新しい家に行くんだから」

「ジュリアは？」

「え？」

「ジュリアとおばあちゃんも一緒に行くんだろ？」

「え...」

「みんなで新しい家で暮らすんだよね」

そう...思ってたの...みんなで行くって...

「俺、ジュリアのとなりの部屋がいいなあ、そしたらいつでも守れっからさ」

「私は...行かないの...」

「え？」

「私も...おばあちゃんも...行かない...透だけよ...」

透がポカンと口を開けて...

「透だけが新しい家に行くの、そこで透と同じような友だちと一緒に暮らすのよ」

「どう...して？」

「そ、その方が...透にとっていいことなのよ」

透はボーッと何かを考えていた。

「き、きっと、楽しいわよ、いろんなこと教えてもらえるし、いっぱい友だちも...」

「それは...」

透は暗い顔で...

「ジュリアのおとうさんの...命令...」

「命令？」

でも...そうよ...

「あの人が...悪いのよ...」

「そ...か...」

透はそれっきり黙ってしまった。

事務所の受け付けで手続きを済ませると、係の人が来た。

「透くん、君の新しい部屋に行こうね」

透は私の方を見た。

「透、早くいきなさい」

透は私をジッと見つめて...

「ジュリア...」

その目は苦しそうに...私を...

「俺... 月を見てるから」

「え？」

「約束したよね、離れてても同じ月を見ようって」

私は...

「そしたら...淋しくないって...」

胸がギュッと痛くて...

透に背を向けて玄関を走り出た。

事故

透がいなくなって二週間。

「家の中がガラ〜ンとしちゃったねえ」って、おばあちゃんは言うけど、
今までは、おばあちゃんと私と二人で暮らしてたんだから、これがふつうなんだよ。

透がいなくなった次の日、子どもたちは大騒ぎだった。

「なんでトールは来ないの？」

「透おにいちゃんは新しいお家に引越したの」

「もうここには来ないの？」

「そうよ」

途端に泣き出す子どもたち。

「イヤだあ、トールがいなきゃイヤだあ」

そんなこと言ったって...

いちばん荒れたのはマサルくん。

荒れたっていうより、ふくれつつらして口聞かなくなった。

また乱暴になってきちゃったし。

だけど...

どうしろっていうのよ？ なんの関係もない透を置いておくわけにはいかないんだから。

おばあちゃんと二人きりの夕食。

「透ちゃんは何食べてるのかねえ」

「知らないわよ、ちゃんと食べさせてもらってるでしょ」

「元気かねえ」

「同じような子たちと一緒にんだから楽しくやってるわよ」

「そうかねえ」

「そうよ、私たちのことなんて、もう忘れてるわよ」

「洋子、あんたは淋しくないのかい？」

「なわけないでしょ？ なんの関係もないヤツなんだから」

二週間、ずっとこんな会話。

もういいかげん透のことなんて忘れたいのに...

早く忘れて前の生活に戻りたいのに、イヤになっちゃうよ。

お風呂から上がって部屋に戻ると、部屋の前には誰もいない。
ボタンとドア閉めて部屋の中に入ると、カーテンの隙間から明かりが漏れてる。
カーテンを開けると...
あ... 満月。
この二週間、ずっと雨や曇りで月は出てなかった。

透は...
この月を見てるのかな...

見てるわけないよ！
きっと今頃は同じ仲間の女の子を「ジュリア」だと思い込んで、
その子におやすみの抱っこして、その子に月の話してるんだよ。
だって、透は一度も私のことをお姉さんって呼ばなかったし、
洋子なんて一回も呼んだことないじゃない。
透の目には、私なんて映ってなかったんだよ。
私のことなんて見てもいなかったんだよ。
透が見てたのは、透の妄想が作り上げた「ジュリア」だけ。
透が好きだったのは、私じゃなくて「ジュリア」。

透が住んでいるのは、私とは別世界。

カーテンを閉めて、電気を消した。

誰かが... 来る...
怖い...怖い...怖い...
突然 目の前が真っ赤な血で...
叫び声...誰の...
イヤ—————ッ！
激痛が...胸が焼け焦げるように...
助けて...
助けて—————！

自分の声で目が覚めた。

汗びっしょり...

「イタッ...」

なに？ 胸のところがズキズキしてる...

見ると、胸のアザが赤黒く腫れていた。

やだ...なんで...

き、気持ち悪い...

時計を見ると、まだ4時...。

寝なきゃ...。

でも...

なんだか...なかなか眠れなくて...

気がつくともう起きる時間になっていた。

久しぶりに晴れて、今日はお外遊び。

みんな、ずっと教室の中だったからエネルギー余しちゃってたもんね。

「あっ！ カツヒロくん！ ミカちゃんにお砂かけちゃダメよ！」

やれやれ、雨が降ってた方がよかったかも。

今朝の夢...なんだったんだろう...

まだ胸のアザのところが痛痒い...

血の夢...

『ジュリアが血を見ると俺も見るんだ』

バカじゃない...そんなこと...あるわけないよ...

透の妄想だよ...

「洋子先生！」

佐藤先生の声でハッと我にかえった。

「裕介くん、お漏らししちゃってるわよ！」

「え？」

裕介くんがベソかいて、気持ち悪そうに股をひろげて立っていた。

ズボンからポタッポタッっておしっこが...

あ〜あ〜あ。

「裕介く～ん、オシッコしたかったら言ってね」

着替えさせなきゃ。

裕介くんの手をつないで中に入ろうとしたら、

「洋子先生！ マサルくんが脱走しようとしてる！」

「えっ？」

「こっちは私がやるから、つかまえてきて！」

「は、はい」

もうっなんなのよおっ！

「マサルく——ん！ ダメよ——！ 戻ってきなさ——い！」

必死に走るけど、マサルくんはピューッと出口の方に行っちゃって、

「マサルくん！ ダメ！」

マサルくんは、とうとう外に出ちゃって、道路を渡ろうとしてた。

「マサルくん！ 危ない！」

マサルくんが道路の真ん中に！

あわてて外に出ると、マサルくんはもう道路の向こう側に渡ってた。

「マサルくん！ そこから動いちゃダメよ！」

私が道路を横切ろうとしたそのとき、向こうから車が猛スピードで走ってきた！

「あっ！」

まるでスローモーションのように車がどんどん近づいてくるのを見ていた...

身体が動かない...

そのとき...

突然向こう側の生垣に突き飛ばされた。

え？

ドンッ！

重たく鈍い音が背中で聞こえた。

キキキキキ————ッ！

急ブレーキの音。

園児たちの叫び声。

なに？ どうしたの？

マサルくんが私のそばで、真っ青な顔して道路の方を見ている。

え？

振り向くと、あわてて車から出てきた男の人が前の方に走っていく。

だ、だれか轢かれたの？

ま、まさか、園児？

私もあわてて車の前に走った。

そこには血まみれで倒れてる人が...

えっ？

その顔は...

うそ...

透...

うそ...

私は駆け寄って、血がドクドクと出ている顔を...

透...うそ...なんで...透...うそ...

目の前が真っ赤な血で染まる...

誰かが私の中で叫ぶ...

そして...

「イ...イヤ...イヤ...」

私は...

「イヤ-----ッ！」

血だらけの透にすがりついた。

透の死

手術中の電気がまだ消えない...

手術室の前の長椅子に...もうどれくらい座っているだろう...

幼稚園に電話をしに行った佐藤先生が戻ってきた。

「今日はもう全員帰したそうよ」

佐藤先生はそう言いながら私の隣りに座った。

「マサルくんが大変だったらしいわ、自分のせいだって」

佐藤先生はそう言ってため息をついた。

「マサルくんの...せいじゃ...ないです...私の...私が...悪い...」

「洋子先生、自分を責めちゃダメよ、事故だったのよ、しかたなかったのよ」

佐藤先生の慰めの言葉も...今の私の心には...染みてこない...

「そうそう、青葉学園から電話があったんですって」

「え？」

「透くん、明け方に脱走したんだそうよ」

「明け方...」

「それまではずっとおとなしくしてたらしいんだけどね」

まさか...あの夢...

まさか、そんなこと、お願い、助かって、お願い...

手術中の電気が消えた...！

中から血だらけの手術着の先生が出てきた。

「いちおう手術は終わりましたが、はっきり言ってかなり危険な状態です」

「え...」

「今からICUに移して様子を見ますが、予断は許されませんね」

「と...透に... 透に会わせてください」

「今はどなたも面会できない状態ですので」

「おねがい、会わせて！ 透に会わせて！」

そのとき、手術室からトレーラーが出てきた。

何人もの看護婦があわただしくトレーラーを押して走っている。

「と、透！」

駆け寄ったときには、もうICUと書かれたドアが閉められてしまった。

「透！ 透！」

ドアをドンドン叩くと、中から看護婦が険しい顔をして出てきた。

「今、危険な状態ですので静かにしてください」

そう言うとバタンとドアを閉めた。

「洋子先生、おまかせしましょう、ね？ 大丈夫よ、大丈夫だから」

佐藤先生に肩を抱かれて、長椅子に座らされた。

もう何時間もここに座ったまま...

佐藤先生がコーヒーを買ってきてくれたけど、飲む気になれない...

頭の中が...もう真っ白で...何も考えられない...

ううん...考えるのが怖い...何も考えたくない...

急に中が騒々しくなった。

看護婦や医者のがする。

バスン、バスンという音...

なに？ どうしたの？

そして... 静かになった。

カチャッとドアが開いて、医者が出てきた。

私の顔を見て...そして...

「残念ですが...」

「え？」

「5時29分... ご臨終です」

な...に...？

看護婦たちも次々と出てきて、神妙な顔で頭を下げて去っていった。

「どうぞ」

一人の看護婦が中に入るようにとうながした。

な...に...？

頭がボーッとして...

佐藤先生に肩を抱かれたまま部屋の中に入った。

ベッドの上に...

包帯だらけの身体...

頭にも包帯が...

でも... 顔は眠ってるみたいに...

「透くん...」

佐藤先生の嗚咽が聞こえて...

私は...ただ...透の顔を見ていた...

「園長先生に電話してくるわね」

佐藤先生が涙声でそう言って部屋から出ていった。

私は透の閉じた目を・・・ 今にも開きそうな気がして・・・

うそ...なに...どうということ...

バカじゃない...私のこと...かばって...

『俺、ジュリアのためなら、死んだっていいよ』

私はジュリアじゃないのに...

透が愛してるジュリアじゃないのに...

バカみたい...私...バカみたい...

そうよ...私...ジュリアに嫉妬してたのよ...

透に...あんなに大切に思われて...あんなに愛されてるジュリアに...

透の頭の中の架空の女の子に嫉妬してたのよ...

だって...

私...好きだった...

そうよ...好きだったのよ...透が...

弟としてじゃなく...

いつのまにか...すごく好きになってしまったのよ...

だけど...

透は...ジュリアしか見てなかった...

透の目にはジュリアしか映ってなかった...

私は映ってなかった...

私は見てもらえなかった...

だから...

せめて...同じ血で...つながっていたかった...

透が私を見てくれなくても...

同じ血が私と透をつないでくれるって...

つながっていたかったの...透と...

何か強いもので...つながっていたかった...

でも...

私と透は...血がつながっていなかった...

私と透をつなぐものがなくなって...

私...悲しくて...辛くて...苦しくて...

「透...」

呼びかけでも...透のくちびるは動かない...

「透...呼んでよ...いつもみたいに...呼んでよ...ジュリアって...

透...私の名前...ジュリアじゃないんだよ...わかってた？

私...ジュリアじゃないんだよ...透が愛してるジュリアじゃ...

でも...いいよ、ジュリアって呼んでも...ジュリアの代わりでもいいよ...

それでも...透が呼んでくるなら...それでも...いいから...」

透のくちびるは動かない...

「透のバカ！　なんで何も言わないのよ！　何か言ってよ！」

私のくちびるだけが震えて...

「なにやってるのよ！　なによこれ？　うそでしょ！
イヤだ...こんなの...イヤだよおお...透...ねえ...イヤだってばあ...透...」

透のくちびるを指でなぞって...

「まだ温かいよお...うそ...やだ...なんで温かいのよお...　なんでよ？　なんで？　なんで...」

その温もりが消えてしまうのが...怖くて...

私は...透のくちびるに...

KISSをした...

そして...

暗闇の中に引きずり込まれていった。

遠くに... ぼんやりと... 明かりが...

なに... あれは... ろうそくの...

小さな光で... 少しずつ... 見える...

これは... どこかの... 部屋...

石造りの壁...

誰か...いる... 少しずつ...後姿が...

振り向いたその人は... 少し白いものが混じった長い髪...

緑色の瞳が...私を見ている...

お父さん...ふとそう思った...

顔も憶えてないのに...

それにこの人は...

「ジュリア」

え...?

「おまえに護衛をつけることにした」

その男の人は白い長いローブを着ていて...

「隣国が不穏な動きをしている、聖なる娘のおまえも狙われるだろう」

「戦がはじまるのですか」

誰かが...私の口が...勝手に...

「いや、まだだ、しかし用心はしておいた方がいい」

この人は...誰なんだろう...

「おまえの護衛兵となる者は奴隷だった男だ」

私は...黙って...目の前の人の話を...

「しかし、人一倍力が強く俊敏なのだ、護衛にはうってつけの男だ」

私をジッと見つめる緑色の瞳...

「そして... あの男は、命がけでおまえを守るだろう」

そこまで言うと、その人は部屋から出ていった。

部屋の中に...たった独り。

ここは...どこだろう...私は...ここで...なにを...

燭台の横の時代がかった鏡に誰かが映っていた。

黒い長い髪の毛の...青い瞳の娘...

稲妻のような衝撃が走って、突然すべてを思い出した。

これは私...

青い瞳の...

聖なる娘...!

私は代々続く神官の一族の娘。

黒い髪と茶色の瞳の血筋の一族の中に、一代ごとに緑色の瞳の男の子が生まれる。

その子は次の神官として育てられる。

そして、青い瞳を持って生まれた女の子は、聖なる娘として、

一生を神に純潔を捧げて生きるのだ。

ひとつ上の姉は茶色の瞳だった。

姉はこの春に17歳で貴族の元に嫁いでいった。

ふつうの女としての人生...

そして、今、母の胎内にいる赤子が緑の瞳を持つ男の子だったなら、

その子は神官となり、王の娘と結婚して、この一族の次代の神官を生むのだろう。

神官は王の娘と結婚する。

この国は、神官の一族と王の一族の結束で成り立っているのだから。

青い瞳を持った私は、生まれてすぐに母から離され、

聖なる娘として、特別に選ばれた乳母と侍女に育てられた。

私は独り...

いつも独りでここにいる...

さっき...お父様は私に護衛兵をつけると言っていた。

しかも奴隷だったという男を...

なぜ奴隷などを？

聖なる一族と奴隷は両極の存在だというのに...

わからない...

けれど、私はお父様の言葉に従うだけ。

聖なる娘は神官と共にあるのだから...

護衛長が連れてきた男は、背が高く栗色の髪をして、そして...緑色の瞳...

「この者が今日からジュリア様をお守りいたします」

どこかで見たことがある...

「もうお聞きおよびとは思いますが、この者は神官様の命により、

奴隷小屋から連れてこられた者です」

奴隷をこんな近くに見るのははじめてだった。

「ですから、あまりお口をきかれませんかように」

私は黙って護衛長にうなずいた。

奴隷は穢れたもの、家畜と同じだと聞かされていた。

けれど、護衛兵の白い上着、編み上げのサンダルを履いた目の前の若者は、
私たちとなんら変わるところはないではないか…。

その日から、私の傍らにはいつもその男がいるようになった。

私は落ち着かなかった。

生まれてから、いつも独りでいた私は、誰かがそばにいるというのに慣れていない。

ふと振り向くと、男はいつも優しい眼差しで私を見ていて、そしてハッとしたように目を伏せた。

私は戸惑った。

そんな目で見られるのははじめてだった。

みんな私を異質なものとして、どこか距離を置いて見ていた。母でさえ…。

なのに、この男の目は、私を一人の人間として見ていた。

ある朝、いつものように聖所での祈りをしていた。

ここには神官と聖なる娘しか入ることは許されていない。

たとえ護衛の者でも、外の庭園で待っていなくてはならない
祈りが終わって外に出ようとすると、なにやら騒々しかった。

私は聖所のドアを少しだけ開けて、外の様子を見た。

護衛兵たちが集まっている。何があったのだろうか？

「いいか、忘れるなよ、いくらジュリア様の護衛になったからと言って、おまえは奴隷あがりだ」

一人が私の護衛に詰め寄っていた。

「神官一族の護衛兵はな、栄えぬきの家系が代々受け継ぐ名誉ある役職なんだ、

本来ならおまえみたいな穢れた生まれのヤツがなれるようなものじゃないんだぞ」

私の護衛は黙って下を向いてうなずいていた。

「こうやって口をきくのさえ汚らわしいんだ！」

他の一人が私の護衛の顔に唾を吐きかけた。

それでも、男は黙って下を向いていた。

「どうせおまえの母親は奴隷相手の淫売なんだろ？」

男は下を向いたままくちびるを噛んだ。

「金さえもらえりゃ豚ともやるんじゃないのか？」

まわりのみんながゲラゲラ笑った。

男は突然目の前の護衛兵を殴った。

殴られた護衛兵は倒れてくちびるから血が流れていた。

「おまえ！ 俺たちに手を出してただですむと思うのか！」

「反抗した奴隷は処刑だぞ！」

私は...

同じ役職の仲間なのに、生まれだけで差別され侮蔑され異質なものとして扱われる彼が...

青い瞳に生まれたというだけで異質なものとして扱われる自分と重なって...

静かに聖所の扉を開けて外に出た。

近づいてくる私に、護衛兵たちはハッとして、頭を下げた。

そして... 私は彼らの前で、私の護衛兵を抱きしめた。

この人も独りなんだわ...私と同じ...独りぼっち...

みんなは驚愕の目で私たちを見ていた。

聖なる娘が抱擁した者を侮蔑するのは、聖なる娘を侮蔑することと同じになる。

そっと腕を離すと、男は涙で潤んだ瞳で私を見ていた。

「部屋に戻ります」

「は、はい」

私は彼を引き連れて部屋へと続く回廊を歩いた。

その日から、私と彼は何かでつながれた。

それは...きっと...異質なもの同士の心だったのかもしれない。

見つめ合うだけの恋

彼は、他の護衛兵と違っていた。

護衛兵はいつも無表情に神経だけをとぎすまし、まるで人形のように微動だにせず、生きた城壁のようなものだった。

なのに、彼は...

庭園や森を散歩していると、小ウサギをつかまえて私に抱かせてくれたり、花を摘んで花冠を作り、私に被せたりした。まるで... 私といることを楽しんでいるような彼を見ていると、私は...
自分がただの16歳の娘に思えてくる。

彼は私をかけがえのない存在のように守った。
聖なる娘としてではなく...
まるで... 大切な恋人を扱うように...
彼は私をかけがいのない存在のように見つめていた。
聖なる娘を崇める目ではなく...
まるで... 愛しい人を見るように...

ある日、雨上がりの森のぬかるみに足を汚さないようにと、私を抱きかかえた。

私は驚いて彼の顔を見た。

私に触る者は今までいなかった。

聖なる娘に....

けれど彼は私をふつうの娘のように抱きかかえ雨上がりの森の中を楽しそうに歩いた。

私は...

はじめての、人の肌の感触に戸惑い、そして、その温もりの心地よさを感じ、

そして...胸がときめいていた。
まるで...恋する娘のように...

いいえ...

私は恋をしていた...!

彼に...
奴隷あがりの護衛兵に...

自分の気持ちに気づいたとき、私は驚愕し、恐れおののいた。
私は恋をしてはいけないのだ。
聖なる娘は一生を神に純潔を捧げるのだから。

生まれて初めての激しい感情に恐怖を感じた。
けして感じてはいけない感情は、鎖のように私を身動きできなくさせた。

消してしまわなければ!
消すことができないのなら、心の扉の奥に閉じ込めてしまわなければ・・・!

必死にもがけばもがくほど、激しい感情は溢れ出てくる。
閉じ込めようとすればするほど、その何倍もの力で...
私を圧倒し、私を包み込み、恐れよりもその甘美でせつない感覚に...

抗う気持ちすら失ってしまった。

言葉すら交わしたことはなかったのに...
彼が私を見つめる緑の瞳の中には...
私への愛が溢れていた。
私を支える手から...
狂おしいほどの愛が伝わってきた。

私たちは愛し合った。
言葉にしてはいけない心を、見つめ合うことで伝えていた。

くちづけを交わすこともできず、まして契りを結ぶことも許されない恋。

ただ...

毎晩私が寝所に入る前に、ふたりだけになると...

彼が私を優しく抱擁し、

そして耳元で囁く...

「ジュリア、おやすみ」

それは私たち二人にとって、唯一の愛の交わりだった。

私は彼の名前を呼ぶことすらできなかった。

名前には霊力があり、聖なる娘がその名を呼ぶということは、

神に、その者が聖なる娘にとって特別な存在と宣言してしまうことだと教えられていた。

私が名前を呼べるのは神の名のみなのだ。

「ふつうの娘に...生まれたかった...」

森の中で二人きりのときに私は言った。

彼は微笑んだ。

「ジュリアはふつうの娘だよ、いや、俺にとってはこの世でたった一人の大切な娘だ」

私は首を振った。

「あなたの名前を呼ぶこともできない、くちづけも結婚もできない娘だわ」

「それでもいいよ、俺はジュリアのそばにいてだけで幸せなんだ」

彼は私を愛しそうに見つめて...

「俺、ジュリアのためなら死んでもいいよ」

そう言って微笑んだ。

「死んで生まれ変わってもジュリアのそばにいてえよ」

この国では輪廻転生が信じられていた。

人は何度も生まれ変わる。

前世で罪を犯した者は、次の生では奴隷になり、

前世でよい行いをした者は、王や貴族など身分の高い者に生まれ変わると…。

「私は…生まれ変わったら…ふつうの娘になりたい…」

できることなら今すぐにでも…

「そしたら俺と結婚しよう！」

「え？」

「あ…でも、俺がまた奴隷だったらダメだよな」

彼はそう言って淋しそうに笑った。

「だったら私も奴隷に生まれ変わるわ」

「だめだよ、奴隷の暮らしはすげえ辛えんだ、ジュリアにあんな暮らしさせたくねえよ」

私は…胸が苦しくなった…

「あなたは…そんな辛い暮らしをしていたのね」

彼は微笑んで…

「でも、今は幸せだよ」

私の手をそっとにぎった。

「ずっと一緒にいよう、今も、生まれ変わっても」

「でも…生まれ変わったら…あなたは私のことを忘れてしまうわ」

「忘れねえよ！ ぜってえ忘れねえ！」

「いいえ、人は死んだ後、忘却の泉に魂を浸されるの」

「ぼうきゃく？」

「そこで前の人生のすべてを忘れてしまうのよ」

「俺は忘れねえ！ たとえ何されても何があっても、ぜってえジュリアのことは忘れねえ！」

彼は苦しいほど愛おしげな目で私を見つめた。

「約束するよ、ジュリア、俺はぜってえ忘れねえ、そしてジュリアを探す」

私は…ただ…黙って微笑んだ…

それは不可能だと知っていたから…

神官である父は言っていた。

「忘却の泉は神の恩恵なのだ」と...

「もしも前世の記憶を持って生まれ変わったら、苦しむだけなのだ。

自分を殺した相手が自分の母親だとしたらどうだ、自分の恋人が自分の子どもだとしたら？

それはただ苦悩を生み、新しい生を生きられなくさせるだけだ」

「それでは、人はみな前の生を忘れてしまうのですか？」

「そうだ、もしもそれができるとしたら、よほどの聖人だけだろう、

ふつうの人間が忘却の泉を通っても記憶を保つとしたら、狂人となってしまう」

叶わぬことだと知っていても...

私は彼に懇願せずにいられなかった...

「おねがい...私のことを...忘れないで...」と。

彼はうなずいた。

「俺はぜってえ忘れねえ」

その言葉だけでいい... それだけで...

血のつながり

「戦がはじまる」

ある晩、父の部屋に呼ばれて行くと、父は私の顔を見て言った。

「もう時間がない」

「なんの時間ですか？」

「おまえは王の第一王子と結婚するのだ」

私は父が何を言っているのかわからなかった。

「そして、次代の神官を生むのだ」

「で...でも...私は聖なる娘です...」

「だからだ」

「なぜ私が結婚など、それに、神官を生むのは、お母様の役目です」

「あれは神官となるべき息子は生めない」

たしかに先月生まれた弟は茶色の目をしていた。

だけど...

「お父様の子どもが神官となるべきはずで...」

「私にはもう緑色の目の息子は生まれえないのだ」

「なぜ、そんなことがわかるのですか？」

父はろうそくの炎をジッと見つめた。

「昔...愚かな若者がいた」

「え？」

「その若者は身分違いの恋をした」

私は...一瞬...ギクツとして...

「そして女は身籠った...過ちの子どもを...」

父は炎を見つめたままで...

「その子どもは緑色の瞳をしていた」

「え？」

「女と子どもは...若者の父に追放され...奴隷として売られていった」

お父様は...何を言おうとなさっているの...

「神官となるべき緑色の瞳の子どもは一代に一人しか生まれない」

父は顔を上げて私を見た。

「それが、今おまえの護衛をしている男だ」

「えっ？」

「あれは私の息子なのだ」

私は... 呼吸が止まりそうに...

「けれど、あれは神官にはなれない、神官は王の血を引いていなければならないのだ」

「そ...の...こと...を...彼は...知って...」

「いや、知らない方が幸せなこともある」

知らない方が幸せなことも...本当に...そう...

「一ヵ月後に婚礼の儀を行う」

私は呆然として父の部屋を出た。

寝所の前で待っていた彼...

この人は...私の兄なのだ...

私を優しく抱いて...

この腕には...私と同じ血が...

「ジュリア、おやすみ」

耳元で囁く声は...けして結ばれることのない人の声...

私は寢所で一人泣いた。
たとえ結ばれなくても、そばにいれるだけでよかった。
けれど、彼は私の血を分けた兄で...
私は兄に恋してしまったのだ...！
そして、今、私は顔も知らない王子の元に嫁ぎ、子どもを生まなければならない...
なぜ私が？ 私が何をしたというの？
私はただ青い瞳を持って生まれただけなのに！

すべてはお父様が招いた災いではないか！

お父様が身分違いの恋をして、緑色の瞳の子どもを生ませてしまい、
親の言うなりに愛する人と子どもを奴隷として手放して、
そして、もう緑色の瞳の子どもができないからと、私を、聖なる娘を嫁がせるなどと....

ひどい！ お父様はひどい！
ぜったいに許せない！ ぜったいに！

けれど...
私も罪を犯していた。
聖なる娘なのに恋をして...
しかも...知らなかったとはいえ...実の兄を愛してしまった。

これは、神のくだした罰なのだろうか...
彼を愛することが罪なのなら...
私は一生罪を負って生きていくしかないのだ...

婚礼の準備があわただしく行われた。

隣国との戦が始まり、敵はすぐそばまで迫っているというのに、婚礼など馬鹿げてる。
けれど、神官である父の命令は王の次に絶対なのだ。
私はおとなしく従うしかない。

「できることなら...」

彼の声は少し震えていた。

「ジュリアを連れて逃げてえよ...どこか別の国で...二人で暮らしてえ...」

それはけっして叶わぬ夢...

たとえ逃げることができたとしても、私たちはけっして結ばれてはいけないのだ。

兄妹なのだから....。

いよいよ婚礼を明日に控えた夜。

寢所へ続く回廊の窓から月が見えた。

「見て...月よ...」

彼も私のとなりに来て、二人で黙って月を見ていた。

「月は...どこからでも見えるわ...どんなに離れていても...同じ月を見れる」

私は自分に言いきかせるように...

「だから...月が出たら...一緒に見ましょう...たどえはなればなれになっても...

同じ月を見ていると思えば...きっと...淋しくないから...」

「見るよ」

彼の声は強く、せつなく、そして...

「必ず見てるよ...ジュリアと一緒に...同じ月を...」

寢所の前で彼が私を抱きしめた。

いつもより強く...いつもより長く...

ああ...明日で...永遠に別れなくてはいけない...
せめて...せめてこの身体に流れている同じ血で...
つながっているといたい...
私たちをつなぐものは...
もうそれしかないのだから...

「ジュリア、おやすみ」

耳元で囁く彼のを...けして忘れない...

最期のとき

明け方、異様な物音で目が覚めた。

どうしたというのだろう...

婚礼の時間はまだまだのはずなのに...

バタンと扉が開いて、彼が息せき切って入ってきた。

「ジュリア！」

「ど...どうしたの？」

彼は苦悩の表情を浮かべて私を見た。

「神官さまが...」

「え？」

「殺された」

「えっ...」

「聖所の中で、たった今...」

「な...なぜ...」

「敵が街の中に入ってきたんだ、街中を焼き尽くして、この城の中にも」

彼が私の手をとった。

「逃げよう！ ここにいたら殺される！ 早く！」

私はまだ事態がよく飲み込めないまま、彼に手を引っ張られて寝所を出た。

回廊の窓から、真っ赤な炎に包まれた街が見えた。

こんな...こんなことが...

信じられない光景に呆然としていると、彼が手を引っ張った。

「早く！」

彼は、使用人たちが使う裏階段へと私を連れてきた。

すごい速さで駆け下りる彼についていけず、私は転びそうになった。

彼はすかさず私をおぶって長い階段を駆け下りた。

外に出ると、きな臭い匂いがあたりに漂っていた。

叫び声や味方の兵士たちの怒鳴り声が聞こえる。

怖い...怖い...

彼は今度は私を抱きかかえて走った。

森の中へ...

森の中の、いつも私と彼が座っていた木の根元に隠れるようにして腰を下ろした。

「このまま...殺されてしまうの...」

私の震える肩を、彼が強く抱いた。

「そんなことさせねえ、ぜってえ俺が守るよ」

遠くから草を分け入って走ってくる足音が聞こえた...！

「逃げよう！」

彼が私の手を取って森の奥に走った。

怖くて足が動かない...

私は石に足をとられて転んでしまった。

「ジュリア！」

彼が私を起こそうとしたとき、

「いたぞ！」

すぐ近くで声がした。

何人もの敵の兵士がすごい勢いで追いかけてきた...！

彼は私を背中で隠すようにして敵の前に立った。

敵が剣を抜いて、彼に襲いかかってきた！

「ジュリア！ 逃げろ！」

「イ...イヤ、あなたを置いて...」

「俺もすぐ行くから！ 早く！」

私は森の奥へと駆け出した。

背中で剣と剣が激しくぶつかり合う音を聞きながら...

振り向くと、一人の敵の兵士が私を追いかけてきていた。

「キャー！」

敵の兵士が剣を私に向けたそのとき、

「ジュリア！」

私の前に彼が...

ザスッという鈍い音がして...

血しぶきで目の前が真っ赤になった...！

敵が彼の胸から剣を抜くと、彼はヨロヨロと倒れこんだ。

イ...イヤ...

「イヤ——————ッ！」

胸を押さえる彼の手の間からドクドクと血が流れて...

「イヤ、おねがい、イヤ、死なないで、死なないで！」

「ジュ...リア...逃げ...ろ...」

「イヤ！ イヤ！」

そのとき、焼けつくように熱い激痛が...

「ウッ...」

い...息が...で...きない...

「ジュ...リア...！」

剣を抜かれたと同時に私は地面に倒れた。

「ジュリア...ジュ...リア...」

彼が苦痛に顔を歪ませながら私を抱き起こした。

私は...ボンヤリとしか見えない彼の顔を手で触れた...

「ねえ...やく...そく...よ...生まれ変わったら...」

「約束する...俺は...忘れねえ...ぜってえ...ジュリアを...さが...して...」

私は...

「クラ...レン...ス...」

はじめて彼の名前を呼んだ...

彼のくちびるが...私のくちびるに触れて...

私たちは...はじめての...そして...最後のKISSを...

そして...

白い光の中に...

包まれて...

気持ちがいい...とても安らかで...ずっとこうしていたい...

誰かが...私を呼ぶ...おだやかな...優しい声で...

顔をあげると...

彼が立っていた...優しく微笑んで...

待ってたんだ...

彼のくちびるは動かないのに...彼の言葉は聞こえた...

私を？

彼はニッコリと笑って...

思い出してくれるのを...

思い出す...なにを...？

俺たちが愛し合っていたことを...

私は笑った...

私はずっとあなたを愛しているわ

彼が私を抱きしめた

愛してるよ

愛してるわ...もう二度と離れたくない...ずっとそばにいて...私のそばに...

私たちはKISSをした

真っ白な光が私たちを包んでいった...

名前

誰かが...

私の名前を呼んでる...

目を開けると...

一瞬...自分がどこにいるのか...わからなくて...

「ウ...」

耳元で声がある...

顔をあげると...

彼が...

「ウッ...ウウ...」

苦痛に顔を歪ませていた...！

い...生きてる...

生きてる！

「だ...だれか...」

私は叫んだ。

「誰か来て！ 誰か来て————！」

医師や看護婦たちが彼を取り囲んで、あわただしく動いている。

私は、ただ呆然とその様子を見ていた。

佐藤先生がおばあちゃんに電話をかけに行き、戻ってきたら私が叫んでたと言った。

ものの5、6分の間...

たった5、6分？

私は“あの中”で、何ヶ月も過ごしたカンジがしていたのに...

ううん...ずっとあそこで生きていた気さえしていた...

あれは... なに？

幻覚？ 夢？

それにしては妙にリアルだった。

触感や匂いすらリアルに感じていた。

ここにいることと、あそこで生きていたことの、どちらか現実なのかわからないくらいに...

どっちが夢？ どっちが現実？

今...目の前で起こっていることは...なに？

これは本当なの？ 夢？ 幻覚？

「蘇生しました」

医師が汗びっしょりの顔で言った。

「まだ少し血圧は低いようですが、いちおう峠は超えたと言っていいでしょう」

「ほん...とに...生き返ったの...ほんとに...」

「ええ、まだ予断は許されませんが」

彼の胸に取り付けられた機械が規則的な音を出し続けている。

心臓が動いてる...生きてる...透は生きてる...

医師と看護婦たちは処置を終えて部屋から出ていった。
佐藤先生も、またおばあちゃんに電話すると言って出ていった。

目をつぶっている透の顔を見ても、まだ信じられなくて...
死んでいた顔と変わらなくて...
違うのは、規則的に心音をとらえる機械の音だけで...
ううん...死んだことさえ信じられなかった...

透の瞼がピクピクと動いた...!

「と、透!」

重たそうに瞼を開けて、焦点の合わないような目つきでボーッと天井を見ている。

「透!」

ゆっくりと私の方に顔を向けて...
ボーッと私の顔を見て...
そして...

「俺...思い出したよ...」

寝ぼけたような声でそう言った。

「な、なにを?」

「一度だけ...呼んでくれたよね...クラレンス...って...」

それは...あの世界の中で...最後に私が呼んだあの人の名前...!

私は... 息が止まりそうなくらいの衝撃を...

「俺の名前を呼んでくれたんだ」

透はそう言って、嬉しそうに微笑んだ。

あれは...

あれは...本当に...

「ジュリア」

透が私を見つめる...愛に溢れた瞳で...それは...あの人の目で...

時を越えて私を愛し続けている目で...

私を見ている...私を...!

彼が呼ぶその名は...

ジュリアは... 私!

私の胸は愛でいっぱいになって...時を越えた愛が溢れ出して...

苦しいほど...愛してる...この人を愛してる!

「もう...二度と死なないで...私を愛してるなら...ずっとそばにいて...」

彼は微笑んだ...

「約束するよ」

そう言って...

約束...

彼は約束を守ってくれたんだ...

生まれ変わっても...私のことを忘れないって...

『約束するよ、ジュリア、俺はぜってえ忘れねえ、そしてジュリアを探す』

そんなこと...できるはずのないことを...彼は...

彼がずっと言っていたことは妄想なんかじゃない、本当のことだった。

だって、私の中にもある、あの世界が、あの記憶が...

あれは、私と彼の記憶なんだ...！

透は順調に回復していった。

私はずっと透の看病をした。

でも、尿瓶にオシッコを取ることだけは、透は絶対にやらせたがらなかった。

「いいじゃない、きょうだいなんだから！」

「ち、ちげーよ」

「あら、私たち血のつながった兄妹だったのよ」

「え？」

「あんた、本当は神官の息子だったのよ」

「えっ？」

「神官が若い頃、身分の違う女の人に生ませた子どもなんですよって」

透が驚いた顔で私を見た。

「本当よ、神官から聞いたんだから」

「それじゃ、俺たち...」

「そう、あのときは絶対に結ばれなかったの」

「そうか...」

「ね？ だからいいじゃない！ 兄妹だったんだから！」

「い、今はちげーじゃんよお」

私たちは、こんな会話を普通にするようになった。

他の人が聞いたら頭がおかしいと思うかもだけど、私たちには普通の会話だった。

園児たちも佐藤先生に連れられてお見舞いに来た。

マサルくんは透の顔を見た途端、泣き出しちゃって、透に抱きついた。

「トール...ヒック...ごめんね...ヒック...」

「マサルのせいじゃねえよ」

「そうよ、マサルくん、透は私を助けて轢かれたんだから、マサルくんのせいじゃないのよ」

「ジュリアは昔っから足が遅せえんだ」

「ちょ、ちょっと、なによそれえっ!？」

透が笑って、みんなも、マサルくんも笑った。

ったく、でも、ま、いっか。

みんなが帰ったあと、透の脚のキブスは、子どもたちが描いた絵や言葉でいっぱいになった。
女の子はハートなんか描いちゃって、まあ。

「早くみんなと遊べてえ」
って、子どもみたいなんだから！

「あ... でも...俺... もう幼稚園に戻れねえんだ...」
「え？」
「ケガが直ったら...また...あの新しい家に行くんだよね」

あ...

「な、なに言ってんのよ！ マサルくんがまた脱走したら誰がつかまえるのよ！」
「え？」
「どうせ私は足が遅いんだから！ あんたがつかまえてくれなきゃダメでしょ！」
「あ、う、うん」
「それに、あんたは私の護衛兵なんだから」
「うん」
「それに...クラレンスはジュリアのそばにいてくれなきゃ... 約束したでしょ？」

透が愛しそうに私を見て... 微笑んだ。

透がリハビリを始めて一ヶ月が経った。

だいぶ歩けるようになったけど、先生が言うにはひどくケガをした左脚は一生引きずるらしい。
しかたないよね、あれだけのケガで、しかも一度死にかけて、ここまでになったんだもん。

いろいろな検査も行われた。
そして、驚いたことに、透には知的障害の徴候がないと言われた。

「で、でも、福祉事務所の人に知的障害者だって言われたんですけど...」

「どこで検査したんですか？」

「さ、さあ...」

「少なくともこの結果では知的障害は見られませんね」

「そ、それじゃ、直ったんでしょうか？」

「いえ、知的障害は直るとか直らないというものではないんです、

年を取って発症する老人性知的障害、いわゆる痴呆症というのがありますが、一般的な知的障害というのは、持って生まれたもの、言い方を変えますと、持って生まれた個性というようなものなんですよ」

「個性...」

「相馬透さんの場合、知的障害ではありません。

読み書きができないのは、おそらく一度も学校に行っていなかったからでしょう。

青葉学園の報告書を読んでも、たまに変わったことを言う以外は、

学習能力・生活能力が健常者と変わらないとありますし」

「そう...ですか...」

「このたまに変わったことを言うというのは、何か心当たりがありますか？」

「え？ あ、いえ」

多分...それは...あの世界のことで...

「まあ、何をもって障害とするか、ボーダーラインを引くのは難しいんですけどね」

「あ...あの...先生...あの...たとえば...前世の記憶を持ってる人って...」

「ハ？」

「あ、い、いえ、な、なんでもないです」

「私の専門分野ではないけれど、そういう報告はありますよ」

「えっ？」

「ただ、それが事実かどうかわからないですけどね」

「そう...ですよ...」

「でも、その人にとっての真実ということは言えるでしょうね」

「真実...」

「精神医学や心理学はまだまだ若い学問ですから、実はわからないことの方が多いんですよ」
先生はそう言って微笑んだ。

どういふことなんだろう...。

ずっと知的障害だと言われていて...本当はなんだったの？

透のお母さんもおじいさんも亡くなっちゃってるし、お父さんも死んでるから、

透の小さい頃に何があったのかわかる人がいないよ。

あ... いる... 透だ。

「小せえ頃は... かあちゃんが泣いてた」

「ハ？」

「俺がジュリアのこととか奴隷だったこととか言うと泣くんだ」

そりゃ...泣くよ...ね。

「ぜってえ人前で言っちゃいけねえって、でも、俺、なんで言っちゃいけねえのかわかんなくて

、

それに、かあちゃんが誰なのかわかんなかったんだ」

「え？」

「初めて会った人だったから」

「ハ？」

「そういうこと言うと、かあちゃん泣いて、俺を外に出さなかった、近所の子が学校行ってっから

俺も行ってえつつたら、おまえは行けないんだよって、行ったらいじめられるよって」

そうか...お母さんが...

「でも、おじさんのことはすぐにわかったよ、おじさんは神官さまだった」

「えっ？」

「ジュリアのお父さんだったよ」

お父さんが...あの世界の神官の父...？

私は...透と血がつながっていないとわかったときの、わけのわからない怒りを思い出した。

そして...クラレンスと血のつながった兄妹だとわかったときの父への怒りを...

同じ人だった...お父さんと神官の父と...

だから私は同じ怒りをおぼえたんだ...

「おじさんは優しくかったよ、おまえのことは俺が面倒みるから安心しろって言ってくれた」

「お父さんは...神官だった頃を...憶えていたの？」

「わかんねえ、神官さまだよなって聞くと、困った顔してた」

きっと憶えてなかったんだ...だけど...あのときの息子と出会った...知らないで...

「俺さ、ケガしてから、頭ん中スースー風が入ってくんだ」

「え？」

「前はさ、なんかゴツチャゴチャして、わけわかんなくて、どこにいんのかわかんなくて、まわりとか全然ちがうし、ヘンなところで迷子んなっちゃったカンジして、まわりで何言ってんだか意味わんねえし、なんでここにいるんだろうって」

透はそう言いながら顔を歪めた。

「なんか...ずっとヘンな夢ん中にいるみてえだった...」

少しわかる気がした。

あの世界から戻ったとき...私も何が現実で何が夢なのか...しばらく混乱していたから。

『ふつうの人間が忘却の泉を通っても記憶を保つとしたら、狂人となってしまう』

神官のあの言葉...

きっと、狂人になるのではなく、まわりから見たら狂ったように見えるのかもしれない。透はそうだったんだ、ずっと生まれたときからあの記憶を持っていたから、まわりの人たちは透が頭がヘンだと思い込んだのかもしれない。

どうして・・・

「どうして・・・ あなたは憶えていたの・・・」

独り言みたいに呟いた。

「約束したから」

彼は・・・ そう言って微笑んだ。

あの人生での約束を・・・ あなたは・・・ずっと・・・

「俺、今はわかるよ、あれは前のことで、今は俺は透で、ジュリアは洋子だって」

「え？」

「でも、ずっと好きなんだ...そんだけじゃ変わんねえ」

透は愛しくてたまらないという目で私を見つめた。

あの記憶の中と同じ目で・・・

Timeless Kiss 最終話-今の真実

あれから5年が過ぎた。

花の子幼稚園は、おばあちゃんが引退して、佐藤先生が園長になった。

そして、私は主任よ？ 主任！ エッヘン！って、いばるほどのことじゃないけどね。
新しい先生も入ってきたけど、保育方針は変わらない。
ノビノビと育てたいってお母さんも増えてきたから、なんとか経営できてるってカンジ。

透は、あれからいっぱい勉強して、いろんな試験を受けて、
なんと！ 今年、保育士の資格を取った！
でも、性格はぜ～んぜん変わらない。
人なつこくて無邪気で子どもみたい。
今も、ほら、子どもたちと一緒に泥だらけになって遊んでるよ。
あ～あ～あ、ひざのそこ、穴あいちゃってるじゃ～ん。

「洋子先生、メグミちゃんがおもしろししちゃったんで着替えさせてきまーす」
「はいは～い」
「洋子先生！」
窓から佐藤園長が叫んでる。
「はい？」
「ケンタくんが脱走しようとしてる！」
「えっ？」

ったく！ 春になると必ずいるんだ、脱走犯が！

ドダバダ走り出すと、
「洋子！ 走るなよ！」
透が叫んで、ケンタくんのところに走っていった。
脚引きずってるくせに私より走るの速いってどーゆーことよっ？
ケンタくんを脇に抱えて透が戻ってきた。

「洋子、走っちゃダメじゃねえかよ」
「だって、しょうがないじゃん」
「転んだらどうすんだよ、もうぜってえ走んなよ？」

「わかったわよお」

なんで私が透に叱られるわけえ？

...って、まあ、叱られるわけはあるんだけどさ。

私のお腹には赤ちゃんがいる。

そう、透と私の子。 今、妊娠8ヵ月。

私たちは、透が二十歳になったときに結婚した。

子どもは透が保育士の資格を取るまではガマンしようって決めたんだけど、チビッとだけ早かったんだよね、エヘヘ。

透のひざを枕にして、ゴロンって寝転がってテレビ見てたら、

「洋子ったら、なんだい、お行儀が悪いねえ」

おばあちゃんが呆れた顔して言った。

「だ～って、お腹が重いんだもん」

「もうすぐお母さんになるってのに」

「いいの、透が私とベッタリしたがってんだから、ねえ？」

「うん」

透がニッコリして私の頭をなでた。

「あらあら、仲がいいねえ」

おばあちゃんがそう言って笑った。

私と透の“新居”は元お母さんの部屋。

「洋子、ほら、月が出てるよ」

よいしょって立ちあがって窓のところに行くと、きれいな満月。

「わあ、きれい」

透と見る月...一緒に見る月...はなればなれで見ると、ずっときれい。

「ねえ、透・・・」

な～んとなく・・・

「ジュリアだったときの私と、今の私と、どっちが好き？」

聞いてみたかった。

「どっちも」

模範的な答え・・・ いいけど。

「今は、今の洋子が好きだ」

「え？」

「もし、前のことなんにも憶えてなくて洋子と会ったとしても、俺、やっぱりえ洋子が好きになった」

私は嬉しくて透に抱きついた。

「洋子は？ 今の俺と前の俺と、どっちがいい？」

「クラレンス」

「な、なんだよそれえ」

「アハハ！ ウソ！ 今は今の透が好き！ すごく好き！」

私たちはKISSをした...

クラレンスとジュリアは... 今は透と洋子で...

透が私を抱きしめる。

その腕から伝わるのは私を愛している彼の心・・・

「洋子、おやすみ」

耳元で囁く声は... 優しくて・・・

今のふたりの日々が、あの記憶と混じり合い、そして、あの記憶は今の色になっていく。

私たちは、今、愛し合っている。

それだけが今の真実。

こうしてふたりが出会った、それだけが今の真実。

こうして抱きしめあっている肌の温もり、今感じているのはそれだけ。

それだけでいい。

FIN.